

井上アヤ子

もう一度、  
お母さんと  
呼んで



井上アヤ子

もう一度、  
お母さんと呼んで





部室前で、愛車と共に



愛車購入時、左手前が洋行

競技大会当日、友人と





競技中の洋行と愛車



63年、第27回関東甲信越学生自動車連盟競技大会優勝の記念写真、  
2列目左端から2人目が洋行



0 歳



1 歳



3 歳



4歳



3歳



小学生の頃、妹と



小学生時代

高1、江風祭にて



中学生時代





## まえがき

「交通事故死」目を閉じ、耳を塞ぎたくなる悲しい言葉。誰もが他人事のように、自分だけは、自分の身内だけはあり得ないと考えているように、私達家族もそうでした。

真剣に生と死について考えたこともなく、生きているのを当然と思い込み、平素安易に暮らしてきました。まして愛する息子が、親よりも先に逝く非情な現実もある事など、全く考えてもみませんでした。

そして、そんな私達に悲しい知らせが入ったのは、一九八八年九月十四日、午前二時二十分頃でした。悪夢であるならば、早く覚めて欲しいと思いつつながら、この現実を否定するものは、何一つありませんでした。

我が子、洋行の事故死という極限の悲しみの中で、私は心の奥底でやるせ無い

思いを、ノートに書きだしました。咽び泣きの涙が乾いては又書きました。こうでもしなければ、辛さに負けてしまいそうになるのを、必死に堪えて書き留めたのです。これが活字になるとは思いもよらず、或る時は仏前で、又は洋行の部屋で、ただ思い出すままに書いたのです。私の辛さを支えているのは、残された一人娘の千鶴と、ただ書くことだったのです。

この様な時、私の母が一冊の本、丸岡秀子の『声は無けれど』を勧めてくれました。この本が私の心を励まし、洋行の二十一年間の回想記と、母親としての私の心の揺れ動く様を、一冊の本にまとめた気持ちにさせてくれたのです。

洋行は、私達家族に、何も言わないで逝ってしまったのです。しかし洋行は、今にして思えば、私達に沢山の新しい出会いや、思い出を残していつてくれました。その出会いが、悲しみの極限を味わった私の心を、どんなに励ましてくれたことでしょうか。人の情けと、温かい思いやりの心に触れて、空気の抜けた風船の様な私の心が、少しづつ膨らんできたのです。

私をここ迄、立ち直らせて下さった沢山の皆様、そして長岡技科大自動車部員の励まし、本当にありがとうございます。

最後に、この本の発刊にあたり、快くお力を貸して下さいました新潟日報事業社の方々に、心から厚くお礼申し上げます。

一九八九年

井上アヤ子

# 目次

口絵

まえがき

序章 八月にもどりたい

第一章 事故、それから的一年

予感、真夜中の電話、美しい顔、無常に泣く、無念の  
涙、無言の帰宅、白いヘルメット、友人に支えられ、  
美しき髪、薄化粧、懐かしき顔、或る友情、白い鳩と  
共に、胸に抱かれて、小さな虫、車のわだち、ポーク  
カレー、思い出のコーポアルファ、一人になって、心  
の迷い、揺れる心、遺品、八月に戻りたい、青春のピ  
テオ、秋晴れの四十九日、洋行の夢、雪の足跡、長岡  
と聞くだけで、セカンド・バッグ、『YOU』、卒業生  
との別れ、生と死、若者達へ

## 第二章 残された日記

97

一、残された日記

二、終止符

三、修学旅行

## 第三章 回想記

133

誕生、幼かりし頃、初めての旅行、妹と共に、転勤、

大野小学校での二年間、曾野木小学校時代、中学生時

代、ゴルフのクラブ、南高校へ、高校時代、学生服、

物真似、或るアイデア、予備校時代、迷いの中での決

意、記念樹、技科大一年生、技科大二年生、忘れられ

ない言葉、最後の夕食、最後の電話

## 第四章 温かな手紙

179

一、悲しみを強さや深さにして

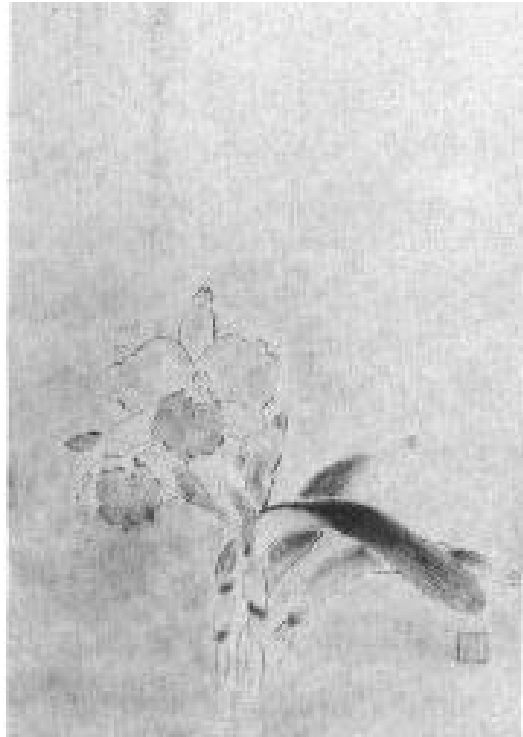
平野 順子

181

二、運命に負ける事なく	中村 幸子	183
三、涙が枯れ果てる迄	安藤喜代子	186
四、花に託して	村上 信子	189
五、自分に負けるな	後藤 清子	191
六、想い出の中の君	嶋 陽二郎	193
第五章 永遠の誕生日		197
一、佐渡の見える丘で	祖母	199
二、五月		203
あとがき		

序章  
八月にもどりたい

千鶴





## 八月にもどりたい

あんなに元気だったお兄ちゃんが

車が大好きだったお兄ちゃんが

流れ星のように、アツという間に逝ってしまった

たった一人のお兄ちゃんだったのに

私達に「さよなら」も言わないで

お兄ちゃんが、死んじゃうなんて

こんな事は考えてもみなかった

お母さんは、ワンワン泣いた

お父さんの涙を初めて見た

あんなに大きなお父さんが

小さく、小さく蟻アリのように見えた

私も泣いた、思い切り泣いた

涙の粒を集めたら

小さな泉が出来るくらいに

お兄ちゃんのバカ、バカ、バカ

来年こそ、北海道旅行するんだと

あんなに楽しみにしていたのに

学校から帰ってくると

お母さんのまぶたが蜂に刺されたように

赤く、ふくれあがっていた

たった一人で泣いていたから  
毎日、お兄ちゃんの写真の前で  
学校での一日を報告した

八月に戻りたい、もう一度でいいから戻りたい  
特に八月は不思議なくらい

お兄ちゃんと沢山、沢山話した

佐渡の田舎で

首が痛くなるくらい

夜空に輝く星たちを

毎年、眺めていたのに……

お兄ちゃんは何処へ行ってしまったの

天国へ行ってしまったのかなあ

お兄ちゃんの大好きな白い車と一緒に

でも一人で淋しくないかなあ

私も天国へ遊びに行きたい

又私を、隣に乗せてくれないかなあ

悲しい、悲しいバレンタインデー

お兄ちゃんの遺影の前に

白いリボンをつけたチョコの包みが二つ

一つは私から、もう一つはお母さんからよ

ホワイトデーの時は、絶対お返ししてね

お兄ちゃん、もう一度帰って来て

物真似のうまかったお兄ちゃん

又私達のところへ戻って来てちょうだい

私に又、あの笑顔を下さい

毎日、毎日悲しい顔をしているお母さんに

もう一度“お母さん”と呼んであげて

もう一度“ちいちゃん”と呼んで下さい

第一章 事故、それから一年



## 予感

暑かった短い夏の終わりを告げる様に、百日紅が紅色や、白色の小さな花をそこここに付け、初秋の訪れの感じられるその日、九月十三日は、公民館活動の手作り人形の日であり、誰よりも早く公民館に着き、窓を開け、涼風を顔に受けて机を並べる。

いつもの通り手はお人形作り、口はおしゃべりと楽しい一時であった。その時、「ねえ、堀江しのぶが亡くなったの知ってる。まだ若いのに可哀相ねえ」「えっ、堀江しのぶ？」

何処かで聞いた名前である。最近めっきり忘れっぽくなった私の頭が、やっと思い出したのである。マシユマロの様にふっくらし、大きな目をくりくりさせてた女優で、まだ二十三歳だというのに……。

可哀相にと思いなながらも、その時私は、愛する我が子を失って、身を切られる様な親の気持までは、理解する事が出来なかつたのである。

その日私は、久し振りに仲間の方達とお昼を共にし、その帰り洋行と同級生の母親から、

「洋行君、元気？」

と聞かれ、

「あの子、自動車部へ入っているから、何時死ぬか分からないので心配だわ」

と、意外な言葉が口から出てしまったのである、家の子に限ってそんな事は無いと信じていた筈なのに……。その言葉通りになってしまふなんて、これが予感というものだろうか。迷信に惑わされなれないと思っていた私が、ゾツとするものを感じた。息子が、あと数時間後に事故死になろうとは……。丁度私と娘が眠りについた頃、洋行は運命の道を辿っていたのである。

洋行達自動車部員は、車五台で大学を午後十時に出発し、ラリーの練習をして



いたのである。事故は午前零時四十五分に起こり、運転を誤った洋行は、川に転落、僅か水深五十センチで水死、私達と洋行の永遠の別れになってしまったのである。

## 真夜中の電話

遠くで鳴り続けている電話の音に目を覚まし、慌てて階段を降りる私の胸は、激しい動悸に見舞われ、事故の知らせではないかと、震える手で受話器を取った。

「井上洋行君のお宅ですか？」

「落ち着いて下さい、落ち着いて下さい！」

と言いながら、魚沼病院への道順を一所懸命知らせている学生の声が、耳の遠くで聞こえている。ハンマーで打ちのめされた様なショックを受け、上擦る声で、

「大丈夫ですか？」

と問いかけた。しかし学生がどう答えてくれたか、はっきり覚えていない。心臓は早鐘の如く鳴り出し、頭は錯乱し、奈落の底に落ちてゆく……。

タクシーの来る間、私は佐渡の実家に、小千谷の魚沼病院であることを知らせたが、今の時間、出港する船は無い筈である。心細さと、放心状態の中で、我が身に鞭打ちながら、洋行の事を案じていた。

車中、タクシーの運転手の温かい心遣いに触れながら、頭の中は様々な思いで乱れ狂っていた。手や足が無くなっててもいい、ただ、生きていて欲しいと願いながら、真暗闇の高速道路を突っ走る。時々、速度制限を知らせる「チンチン、チン」と鳴る音が無気味にさえ聞こえる中、じっと隣に座っている娘の無言の励ましを感じながら、手を合わせ、神に祈り、「洋行、頑張るのよ。もうすぐお母さんが行くからね」と何度も心の中で叫び、手術中の事迄考えていた。しかし、私が電話を受け取るずっと前に、洋行は私の手の届かぬ所へ行ってしまった。私達は、生きていて欲しいという心にすがっていたのである。

病院に着いたのは、午前四時過ぎであっただろうか。薄明かりの中で、数人の学生が、タクシーの到着を待っていてくれた。その学生の表情から、私は、洋行の死を素早く読み取ってしまったのである。私はまるで夢遊病者の様に病院の中へ吸い込まれるように入ってしまった。

## 美しい顔

看護婦さんが、私達を案内してくれたのは、遺体安置室であり、白い布を被せられた息子は、大勢の学生に見守られて中央のベッドに横たわっていた。仮りに作られた祭壇には、洋行が生前好んで飲んでいたポカリスエットが数本、誰が供えてくれたのだろうか……。

看護婦さんが白い布を取り上げた時、そこには、紛れもない洋行の静かな顔があった。しかし、涙にむせび、号泣する母と娘の姿はそこには無かった。人間は、

あまりにも驚いた時、一瞬、声も涙も出ないものだという事を初めて知ったのである。

ただ茫然と洋行の顔を、見据えていた私も、次第に現実に戻りつつある中で、両手で洋行の頬を撫で、自分の顔を重ねて、「嘘だ、嘘だ」と、心の中で叫び続けた。けれども既に奇跡は、期待出来ない程冷たくなっていたのである。それでも、じつと手を当てていた額の部分に、私の温もりが伝わったのか、生き返った様に暖かくなり、心持ち薄ピンクに変わった様な気がした。前髪の生え際が、うっすらと汗ばんで、少し口を開いて眠るいつもの顔、苦痛や、恐怖の影は少しもない。揺り動かせば目を覚ましてくれそうな美しい顔、私は狂った様に自分の顔を擦りつけた。

どんなに叫んでも無表情で、閉じた目は開かず、心持ち開いた口からは、もはやどのような声も洩れなかった。しかし、私には、「お母さん泣かないで、お母さんごめんなさい」そう言っているかの様に思えた。

## 無常に泣く

私と娘が、タクシーを飛ばしていた頃、佐渡では私の弟が、魚沼病院に電話を入れ、洋行の死を確認し、電話口で男泣きに泣いていたという。洋行を、自分の弟の様に可愛がっていたから無理もない。つい一カ月前の八月には、佐渡でお盆の花の配達を手伝い、忙しそうに飛び回っていたのに。あの姿や、「冗談を言つて皆を笑わせていたあの笑顔は、もう返って来ない。

あの美しい桜の花は、人に惜まれ、一瞬にして花吹雪と化す。命とは、そういうものなのだろうか。『平家物語』や、『方丈記』に書かれてあるように、世は無常である。すべてのものは、絶え間なく変化し続け、止まる事を知らない。無常であるからこそ、あらゆるものが生き生きと輝き、永久に変らぬものは空しいものである。

しかし私は今、無常に泣いている。年の順に亡くなるのが自然であり、これを順縁と呼ぶならば、逆縁の苦しみに身を断ち切られ、これ以上残酷な事はない。残された家族の悲しみも考えないで、享年二十一歳、花の盛りも知らず、ほころびかけたつぼみのままで逝ってしまうとは。

作家、丸岡秀子の『声は無けれど』に、「花は、繊細で非常に短い命ゆえに美しい。造花は、長い間もちますが、やはり誰しも、その手の中で枯れてゆく自然の花を好みます。この言葉は、逆縁も無常の中での変化にすぎないと、思い捨てることを教えていると、私には思えた。若さは、造花のように、けっしていつまでもそこにとどまっではないのだから」

私はこの文を、何度も読み返した。そして、作家、丸岡秀子が言う様に、洋行も短い命ゆえに、多くの友人達の心の中に入れていただくことが出来、二十一歳という命で逝った息子は、自然の花と同じく美しいのかも知れないと……。

## 無念の涙

洋行の顔に手を添えながら、泣き崩れていた私は、千鶴の心を案じる気持しさ  
え失っていた。まして時間の感覚等ある筈がない。窓から差し込んで来る薄明か  
りも、この世のものとも思われず、只、冷たい身体をさすりつつづけていた。

突然、ドアが開き、義理の妹が飛び込んで来た。偶然、新潟の実家にいたとい  
う彼女は、弟の知らせを受けて一番に駆け付けてくれたのである。身内の人が来  
てくれた、その安心感からか、新しい涙が込み上げてきて止まらない。

「ひろちゃん、ひろちゃん！」彼女の叫びが、小さな部屋に響きわたった。生き  
返って欲しい、どうしても生き返って欲しい、その思いが入道雲のように頭の中  
にもくもくと広がっていった。

死の知らせを受けて、高速道路をどんな思いでハンドルを握って駆けつけたの

か、主人が部屋に飛び込んできた。私の背後で、体の底から絞り出すような、うめくような低く、かすれた声を耳にしたのである。

「馬鹿だなあ……」

両手を握りしめ、体は震えていた。

新発田の米良さん夫婦が駆けつけてくれた時、主人の咽ぶような泣き声が私の胸を引き裂いた。押えていた涙が、そして声が、一気に噴き出したのだろう。

弟と私の母が駆けつけた時は、午前九時三十分を過ぎていた。廊下には、自動車部員の学生が悲しみに沈んでいた。一人の学生が私に、

「井上の友達を連れて来ました」

そう言われ、私は、そっと彼女の方を見た。個性的な顔をした、ミニスカートのこの女性に、

「洋行の友達でしたの。本当にどうも有難う」

それ以上は何も言えなかった。ただ涙が出て来るばかりであった。悲しみの冷



たい涙に交って、こんな女性がいてくれたのかと、ほのかに温かい涙がそこにあった。

皆が揃った頃医師が、私達に死因を告げられた。

「外傷はかすり傷程度で、死因は水死です」

その言葉が私の頭に焼きついて離れなかった。水深わずか五十センチで……。この無念さがあとと迄も私を苦しませたのである。

## 無言の帰宅

米良さんから、今後のすべての段取りをしていただき、葬儀場の車で洋行の無言の帰宅である。それは私にとって、何んと長くて辛い時間であつただろうか。いつもは、あの白い車で「ただいま」と元気に帰って来てくれたのに。洗濯物を紙袋にいっぱい詰めて「これ、おみやげ」と言ってくれたのに……。もうその姿

は見られない。命とは、こんなに儂いものなのか。

病院の外には学生達が並んでいた。涙を流している人、じっと堪えている人、声を出して泣いている人、皆同じ思いであった。お世話になった方々に、深く一礼して車に乗り込んだ。学生や、看護婦さんの姿が見えなくなった時、私は、洋行の動かしがたい死を改めて思い知らされたのである。

車に揺られながら、この時私は、魔法使いに毒りんごを食べさせられた『白雪姫』を思い出していた。車が振動する度に、何かの弾みで生き返るのではないかと、小さな望みを捨てられなかった。

数時間前、私と千鶴は洋行の事故を案じながら、手を合わせて夜の高速道路を走っていたのに、今は、腫れぼったい目を辛うじて開けて、洋行と共に無言の帰宅である。私達の悲しみをよそに、後続の車がアツというまに追い越していった。生前、洋行もこの高速道路を何度走って来た事であろうか。それなのに今は……。

車が静かに家の前に着いた時、私は洋行に語りかけた。

「洋行、ほら、お前が十二年間住んできた家に着きましたよ」  
折りしも庭の白いむくげの花が、洋行の死を悼むかのように二つ、三つ咲き始  
めていた。

## 白いヘルメット

病院を出る時、私は学生から白いヘルメットを渡された。その中には少し濡れ  
た赤いジャンパーと、汚れた白いズックが入っていた。そのヘルメットを幼い頃  
の洋行を抱くように、胸にしっかり抱いて帰宅したのであった。このヘルメット  
の中に、赤いジャンパーにそっと包まれた、数枚の写真が入っていたことを、祖  
母が見つけてくれる迄気が付かなかった。

この写真は、枝大の自動車部員が社会人の方達と、山古志村の金倉山へ行った  
時のものであり、新緑の爽やかな金倉山を背に、バーベキューを楽しんでいる一

コマであった。バックには、山草に混って薄ピンクの卵の花が色彩を添えていた。先輩達に混って、いつもの明るい、ひょうきんな洋行が何と嬉しそうに写っていることか。

何時だったか、洋行が赤い薄手のジャンパーを着て帰って来た時、私は「あれっ」と思っで見つめた。彼は生まれてから赤いものを着たことが殆どなかったからである。しかし色が白いで赤がよく似合っていた。そのジャンパーを洋行は大変気に入っていた様子である。

事故の時も、白いヘルメットに赤いジャンパー、そして紺のジーパンを身に着けていたのだった。このジャンパーは、昭和六十二年十一月三日に新潟大学で行われた市民ラリーに、先輩達と参加した時、戴いた記念のものである事を、後で聞いて知ったのである。洋行は私が心配するのを気遣って、ラリーの景品であることを黙っていたにちがいない。

白いヘルメットは、洋行が最後に身に着けていた大切な遺品として、祭壇の前

に何時迄も置くことにした。遺影の前に座る度、私はそつとヘルメットに目を落とした。このヘルメットを被り、シートベルトを着け、ハンドルを握る。その時の洋行の心は、ラリー練習に燃えていたにちがいない。ラリーへの夢は、洋行の青春の証であり、白いヘルメットからは、洋行の熱気が伝わってきた。

私はヘルメットに、そつと手を添え、時には胸に抱き、又或時は被つてもみた。洋行の匂いが私のこころを優しく包んでくれた。

## 友人に支えられ

仮の祭壇の作られた、客間の中央に寝かされた洋行は、何か言いたそうに軽く口を開け、眠っている様な静かな顔、とても死んでしまった者とは思えない程の、それは安らかな顔であった。それに引き替え私は、張り裂けるような胸の痛みで、血の気のない寒々とした氷山のような姿ではなかったのか。

隣人の方々や、親しくしていただいた方達の弔問が続くなかを、長岡技術科学大学の教務部長の千葉賢さんはじめ、東京大学名誉教授の朽津耕三さん、北海道大学名誉教授の半澤宏さんが、菅野昌義学長さんからのお悔やみの言葉を述べられた。大学側の多大なる誠意に対し、ただ感謝の気持ちでいっぱいであった。

しかし、どのような言葉も、愛する我が子を失った痛手を埋める事は出来なかった。逆縁の苦しみは、こんなに深いものであったのか。日が経ち、時間が経つたからといって、心が癒えるというものではない。益々、生前の我が子の、いろいろな仕草が思い出されて胸が詰まる。

夜も更け、中学の友人である奥田君、佐藤君が駆け付け、突然の事故死に言葉もなく、自分の目を疑い、茫然と見つめている中、次々と友人がお別れに来て下さった。特に南高校での親友、板垣君、剛君が来てくれた時は体中に電流が流れたような、激しい痛みを覚えた。洋行の顔に手を当てて、力一杯揺さぶり、涙も拭かず泣いてくれた剛君の姿は、生涯忘れられない。次々に来て下さる友人を見

ながら、

「洋行、お前は本当に素晴らしい友達を沢山持ちましたね。友人のこの涙が見えま  
すか……」

心の中でそう眩いていた。

夜も深く、次第に静まりかえって行く中で、ろうそくの炎と線香の煙だけが、  
絶える事なく悲しみを更に深くしていった。

## 美しき髪

一睡もせぬうちに九月十五日となり、事故発生からまる一日が経った。二十四  
時間前、洋行が死の直前にあつた時、私と千鶴は何も知らないで眠りについてい  
たとは……。もしあの時、私が現場に居合わせていたら、反狂乱になって助け出  
そうとしたであろう。親として何もしてあげられなかった事が悔しくてならない。

事故の一瞬、この子は何を考えたであろうか。家族の事が、友人の事が、それとも何も考える暇がなかったのだろうか。様々な事を考えながら、洋行の顔をじっと見つめていると、二十一年間の楽しかった思い出が、走馬燈の如く頭の中を駆けめぐる。

東の空が、ほのぼのと明け始める頃、外はいつもと変わらない、心持ち肌寒い初秋の朝であった。九州や、東京からの長旅の疲れの為か、親戚の人達はまだ眠っている。真直ぐに立ちのぼるろうそくの炎と線香の煙の中で、「コチ、コチ、コチ」と時計の音だけが聞こえている。その中で私は、棺の中に入れてあげるものを選んでいた。

「カセットテープや、車の本、そして洋行のお気に入りの洋服も沢山入れて置きますからね、櫛も入れておきますよ」

「赤いジャンパーと、あの時履いていた白いズックも、きれいに洗って入れて置きましょうね」



「あつ、そうそう、友人から戴いたクッションと布製の袋も忘れずに入れなくては……」。

「一人で天国に行くのは心細いでしょうねえ。今年作ったばかりのまりかちゃんのお人形を、お母さんだと思つて一緒に天国へ連れて行つてね。そのうち私もきつと行くから待つてね」

氷の様な冷たい顔に、熱い涙がしたたり落ちた。洋行のこの安らかな顔を、すっかりと脳裏に収めながら、黒々とした、艶のある髪を少しだけ切り取り、細くて小さなグリーンのリボンでしっかりと結んだ。そしてお香の入っていた小さな箱の中にそつと入れて、私のハンドバッグの中に収めた。体は硬直していても、髪だけは生前と全く同じく、サラサラとして不思議なくらい光沢を帯びていた。

## 薄化粧

九月十五日、午後七時から始まる通夜に備え、生きている様なサラサラした黒髪に櫛を入れた。洋行の髪をとかしてあげたのは確か小学生の低学年頃迄であっただろうか。その後は自分でとかし、ドライヤーでセットし、鏡とにらめっこするくらい迄成長したのに……。学生服に身を包み、通学していたあの頃が、思い出されて仕方がない。

うつすらと頬紅をさし、口紅を塗る私の手が小刻みに震えた。薄化粧を終えた洋行の顔はまるで生きている様な、温かみのある優しい生前の顔になっていた。底知れない私の悲嘆等考えてもいない様に……。

「洋行、お前は今晚、最高の美しい顔でお友達とお別れをして下さいね。この世のものとも思えない安らかな顔で」

白菊の花を顔の囲りに並べながら、私は心の中でそう語りかけた。普通であれば私がこの支度をしてもらい、送り出してもらおうのが世の常である筈なのに。ここでも又私は逆縁の苦しみを味わねばならなかった。塗りたての淡いピンクの口びるが、

「お母さん、ありがとう」と言っている様な気がした。

葬儀場に到着した私達は、立派に飾られた祭壇の前に棺を置き、改めて遺影の中の洋行を見つめていた。この場に及んでも我が子の死が信じられない。大学側、大学同期生、自動車部、自動車部OB会、友人、そして銀行側からの花輪があげられ、祭壇には生花や果物籠が沢山供えられていた。それは生前の洋行が良き師、良き先輩、そしてOBの方達や友人に恵まれ幸せだった事を物語っているようで、流れる涙をどうする事も出来なかった。

私と同様、洋行の閉じられた筈の目から、筋の様な涙が拭いても拭いても流れ出るのは何故だろう。或る人に、

「皆さんが来てくれて嬉しい時、亡くなった人は涙を流して喜ぶのですよ」と言われた。そうかも知れない。たとえ医学的にはそうでなくても今の私はそう思いたかった。

## 懐かしき顔

二百名以上の焼香人で予定より少し遅れて通夜が始まった。厳粛な儀式の中で、ご住職さんの素晴らしい法話に耳を傾けながら、そつと重い目で遺影を見上げると、微笑んでいる洋行の目が、心なしか潤んで見えた。

法話の中で洋行の名前を二字そのまま取って、法名を釈シヤク洋ヨウ行キョウと決めたことを話された。あの子は釈洋行という仏様になってしまったけれど、私の心の中では、今迄通りの洋行として生前以上に鮮やかに生き続けていくだろう。宙に浮いた様な体をやつと支えて、次々と襲ってくる心の痛みを辛うじて押え、

少しでも多くの方々の顔を拝見しようとしてとめた。洋行は勿論の事、私にとっても、なんと懐かしい方々がいらっしやって下さったことか。

中学三年担任である板垣先生や、卓球部顧問の福地先生、そして南高校二年担任の森先生、三年担任の安達先生のお姿を拝見し、感謝の気持ちでいっぱいであった。高校受験、大学受験と、それぞれに於てご指導下さった先生方、それなのにきょうは、悲しみの別れの日になるうとは……。これを運命と呼ぶならば、神を恨みたくなる。「神様は、意地悪よ」何時だったか千鶴が、私に小さな声で言った言葉を思い出した。

悲しみの焼香の列は、まだ続いていた。これ程沢山の方々が来て下さるなんて、なんと幸せな子であろう。

「洋行、通夜に来て下さった方達と、最後のお別れを心行く迄して下さいね。懐かしい友人達も沢山来て下さいましたね」

生花に囲れた遺影を見つめながら、心の中で語りかけた。

## 或る友情

夜も更け、皆さんが帰られた後、自動車部員の方達から生前の洋行の思い出話を聞き、私の知らなかった別の面を垣間見た気がした。家では我侂だと思っていたあの子が、こんなにも友人に恵まれ、先輩やOBの方達に大変可愛いがついていたとは、有難いことである。

殆ど三晩の徹夜ともなると、気は張ってはいるものの、さすがに若い人達にはかなわなかった。頭は朦朧とし、体がふらふらした。告別式に倒れない様に少し休むように言われたが、とても眠れる筈がなかった。常に頭の中は、缶詰の様に洋行がぎっしりと詰まっていた。

十六日、午前二時半頃、OBの一人である西田さんが、仕事を終えて大阪から駆けつけて下さった友情に、目頭が熱くなった。なかなか出来るものではないこ

の温かい心に、頭の下る思いであった。がっしりとした体のすべてに、温和な優しい心がみなぎっているような人であった。生前、西田さんには、運転の仕方、テクニク、技術等指導していただいたとの事、彼の姿を見て、あの子はどんなにか喜んだことだろう。

短くて、はかない二十一年間の生涯ではあったが、誠に充実した人生の縮図の様な生き方であった事が、せめてもの慰めであった。棺の前に座り、洋行の顔をじっと見つめていると、二十一年前、爽やかな緑の五月に生まれたあの日の事が思い出されて仕方がなかった。

その時、今迄気付かなかった一枚の写真が棺の中に見つけた。どなたが何時、入れてくれたのであろうか。それは高校二年の時、ハイキングで出かけた尾瀬の風景写真で、写真の下に、一九八四年と記されているのが今はとても悲しい。顔を上気させ、輝く目で尾瀬の美しさを私に語って聞かせてくれたのに……。洋行はそれ程尾瀬を愛していたのか。

## 白い鳩と共に

九月十六日、午前十時よりしめやかに告別式が行われた。悲嘆に沈む私の耳に、親友である嶋陽二郎君の弔辞が聞こえてきた。静寂の中に、何処からともなく、すすり泣く声やし、堪え切れない涙が後に続いた。私と洋行は死によつて完全に引き裂かれ、数時間後には、悲しみの極限を味わなければならなかった。頭の中は、迷路の如く入り乱れ、遺族席にやつとの思いで座っている私は、生とは名ばかりの冷たい石の様な姿ではなかったのか。

私は白菊の一輪を、洋行の耳元にそつと置き、じつと見据えていた。これが我が子を見る最後の時なのか、死と生は、ここではつきり永遠の別れをしなければならぬ。もう二度と涙の筋を、拭いてあげる事も出来ない。私の生は、洋行の死と同時に、生きた化石の様なものであった。



献花の続く中、洋行の親友である板垣君が、

「これを井上の棺の中に……。」

と言つて紙袋を差し出した。この場に於て、これ程嬉しい事はない。彼の童顔が涙でかすんで見えた。私自身も、告別式の始まる直前に学生から手渡された、薄紫色の風呂敷包みを大切に抱いていた。この中には、洋行が最後に身に付けていたTシャツや、ジーンズ等が入っていたのである。

長い献花の列で、沢山の花に埋もれながら、天国への旅立ちの儀式をすべて終えようとしていた。洋行の顔は、この世では見られない聖者の顔そのものであった。

葬儀場の前では、沢山の方々が整然と立っていられ、その中を天国への使者をつとめるかの様に、白い数羽の鳩が、一斉に大空高く舞い上がった事は、後から聞かされる迄、私は全く気が付かなかった。白い鳩に守られて、あの子は無言の別れを告げながら、天国に向かって旅立ったのだろうか……。

## 胸に抱かれて

最後の場所に来て、私は、自動車部員の親友でかつ先輩のあの泣き叫ぶ声を耳にした。洋行との最後の別れに心から男泣きに泣いてくれた彼のあの声は、洋行の耳に届いたことであろう。そして私の絶叫と号泣。母親であればこそ、反狂乱になるのは当然で、それが人の偽らない真の姿ではなからうか。

迷った挙げ句、私は千鶴を引き止め、あの場所へはどうしても行けなかった。思春期の感じやすい年頃の上、神經過敏な娘に、ショックを与えなくなかったからであった。私が洋行の年齢の頃、祖父を亡くしてから、死への恐怖を抱いていたからでもある。又それ以上に千鶴と私にとって、洋行との最後の別れを、あの沢山の花に囲れた安らかな顔、姿としていつまでも脳裏に収めておきたかったからでもあった。

そして数時間後、まだ温かみの残った、ズッシリとした重さで、あの子は私の胸にしっかりと抱かれた。何処へ行くにも、だっこしてあげた幼児の頃を思い出しながら、これですべてが終わったことを知り、体中から力がぬけていった。

生まれた時から、背負っていた運命だとしたら、あの子を産むのではなかった。逆縁の悲しみ程、苦しいものはない。その極限を味わってしまった私の体は、まるで空洞そのものであった。

洋行は、私にしっかりと抱かれて、再び我が家の祭壇の中央に置かれた。白菊や白ユリの花に囲まれた遺影を見つめていると、目まぐるしく行われたすべての儀式が、まるで大きなドラマを演じてきた後の様な錯覚すらした。今にでも「ただいま」と言っただけで帰って来そうなの、そんな気がしてならなかった。

## 小さな虫

洋行が亡くなってからというもの、私達家族にちよつとした小さな異変が起つた。告別式を終えて自宅に帰った我が家に、何処からか小さな虫が入ってきた。「ほら、洋行君が虫になって帰ってきたんだよ」

親戚の方のその一言が、私達の心の奥底に響いた。今迄、虫といえば紙でそつと捕まえて、外に捨てていたのに。どんな虫が入ってきてても、それが洋行に思われて、紙でポイツという気持ちにはなれなくなった。

「お母さん、お兄ちゃんが虫になって帰って来たよ！」虫を見つけると千鶴はそう叫んで、虫から目を離さなかった。以前は、虫をあんなに怖がっていたのに。

どんな小さな虫にでも、たった一つの小さな生命いのちがある。その小さな生命で懸命に生きようとしている姿は、やはり美しい。生命の尊さを知った私達は、虫を

も大切にする優しい心になっていた。虫を見つけると、洋行が帰って来てくれたように思われて、嬉しかった。

何時の日だったか朝起きて見たら、小さな虫が動かなくなっていた。やわらかいティッシュに包み、記念樹の桜の木の横にそっと埋めてあげた。乾いた土の上に、熱い涙の雫がまた落ちた。

## 車のわだち

事故の詳しい状況も知らぬまま、十七日には事故現場と大学へ行くことになっていた。高速道路で小千谷インターを降りると、すでに学生の車が二台待っていて、私達を現場へと案内して下さった。

山を登り始めた時、我が子の命を奪った、憎い野辺川が見えて来た。私は、まるで敵を睨み据える様に、この川を恨めしさと、憎しみの思いで見つめていた。

この川さえなかったら、せめて水が流れていなかったら、そう考えていた時、いくつかのカーブを曲がって学生の車が止まった。

「ここが現場なのか……」

私の心臓は、ドキドキ鳴り出し、何とも言えぬ緊張感に見舞われ、一瞬、足がすくむ思いがした。現場に早くお花を供えたいという気持ちと、現場を見る辛さとが入り混っていた。

右カーブを曲がり切れず、川に突っ込む形で落ちたらしい車のわだちが残っていた。その車のわだちを、私は右に曲げてあげたかった。そしたら、あの子は川に転落しなかったであろう。複雑な心境の中で、私は吸い込まれる様にそのわだちに沿って川に飛び込みたい衝動にかられた。

S字型のこの現場は、夜は特に危険な場所で、前方に道が続いている様な錯覚を起こすらしい。砂利道の上に夜でもあり、慎重に運転しなければとても危ない場所であった。一つ運転を誤れば、川に転落死する様な場所で何故練習をしたの

であろう。どんなに悔やんでも、洋行はもう帰って来ない。

現場には、すでに学生達によって、お花と洋行の好物が供えられていた。ろうそくの炎と線香の煙が山の中に吸い込まれ、川は何事もなかったかの様に静かに流れていた。私は無念の涙を拭こうともせず、じっとその川を見つめていた。

もうほんの十数メートル手前だったら、田んぼであったのに、ああ、せめて木が一本生えていてくれたら、衝撃を少しでも和らげてくれた筈なのに……。ガツチリとした二重のシートベルトで脱出できなかったのか、それとも気絶してしまったのか、いずれにせよ苦しんだあとは微塵もなく、眠っている様な姿であった。二十一歳の若い命が、こんなにも儚く消えてしまうものであるとは、全く信じられなく、今だに悪夢の中にいる様な私であった。野草に混じって、一本の野菊の花が固い蕾をつけていた。

## ポークカレー

後髪を引かれる思いで現場を去り、大学の自動車部、部室前に着いた時、洋行の愛した車には、真新しいシートが被さっていた。車の上部が押しつぶされ無残な姿をしていた。しかし、部員達が大学祭を返上して磨いて下さった洋行の車は、初秋の太陽を反射してキラリと輝いていた。座席には、すでに白菊や白ユリの花が供えられ、車の前には、ろうそくや線香、お菓子等も供えられていた。部員達の心遣いと友情に胸が熱くなる思いがし、感謝の気持ちでいっぱいであった。こんな素晴らしい友を持った洋行は、何と幸せな子であつたらう。短かった一年半の大学生活の中で、あの子が得たものは数え切れない程多かつたにちがいない。折りしも大学構内では、十七、十八日と開かれる大学祭が、盛大に行われていた。教務部長さんに、洋行が在学中に属していた材料開発部での教室を見せてい



ただいた時、生きていたならば、この教室で……。そう思うと胸がしめつけられる思いがした。構内を楽しそうに歩いている学生の姿を見るにつけ、無念の涙が体の底から泉の様に沸き出てきて辛かった。

私達は、部員達と一緒に、洋行が事故の日、先輩達と夕食をとった田中食堂で昼食を共にすることにした。最後の夕食に、あの子はポークカレーを食べたという。そして数時間後に事故死になろうとは、誰が想像したであろうか。まさしく世は無常である。又逆縁の苦しみが私を襲ってきた。ポークカレーを美味しそうに食べている学生達の姿を見ると、生きる望みを断ち切られた様な激しい痛みを覚えた。洋行も又、この学生達のように美味しそうにポークカレーを食べたのだろうか……。

## 思い出のコーポアルファ

九月二十五日、洋行が十カ月余り過ごした思い出のコーポアルファからの引越しの日であった。白い外壁の新築したばかりのこのアパートを見つけて、喜んでいたあの時の洋行の顔が目には浮かぶ。私は三度程、このアパートへ来たことがあった。見るものすべて懐かしく、洋行の生活の匂いがして荷物を整理する気にはとてもなれなかった。窓際には、私が持たせた観葉植物ベンジャミンが、小さな緑の葉をいっぱい付けていた。傍らで千鶴が私に話し掛けた。

「これ、私がお兄ちゃんに買ってあげた所ジョージの小物入れ、喜んでくれたのになあー」

「そうだったねえ……」

春休みに、デイズニーランドへ行き、原宿の竹下通りで洋行に買って来てあげ

たお土産であつた。あの頃は幸せであつた。何といつてもあの子が生きていたのだから。

ベッド、洗濯機、机、整理筆筒、台所用品、洋服等、胸が詰まる思いであつた。特に洋行が大切にしていたシンセサイザーや、ラジカセは、主人を失つて淋しそつであつた。又、天体に興味のある洋行に私がこつそり買つてあげた望遠鏡が、ボックスの上に置かれていた。小学六年頃であつたらうか、私と二人であの子の部屋の窓から、星を眺めていたのは……。

すべてが懐かしく思い出された。いつたいあの子は何処へ行つてしまつたのだらう。死後の世界があるとしたら、あの子に会いに行けるのに。私達家族に何も言わないで、アツという間に逝つてしまった。残された家族の深い悲しみを、洋行は天国からどんな気持ちで見つめているのだらうか。そんな事を考えながら、ダンボールの中に荷物を入れ、手伝つて下さつた数人の学生達によつて、荷物は車に詰め込まれた、宮本さんら女性の方によつて、部屋は一段ときれいに片づい

た。

家具や、調度品は洋行の形見として学生達に使っていただくことにした。外は引越しを哀れむかの様に、しとしとと雨が降り続き、その白い外壁のアパートは、雨に濡れて一際美しく見えた。洋行が生前、自分の小さなお城として生活していたこの家とも、きょうでお別れ。

## 一人になって

私がたった一人になれたのは、九月二十日の初七日を済ませた次の日からであった、誰にも遠慮する事なく、静かに洋行の事を考え、思い切り泣くことも出来た。

不安定な精神状態の中で、どっと押し寄せる悲しみに打ちのめされ、いつその事死んでしまった方がどんなに楽であろうと、何度も思った。しかしそんな馬鹿

な事が出来る筈もなかった。せめて娘にだけは、母親としての強さを見せねばと思ひ、出来るだけ明るく振る舞う様に努力し、涙も隠してきた。しかし誰もいない時に思い切り泣きはらした私の目は腫れぼったく、千鶴は私のすべてを読み取る事が出来た筈である。どんなに我慢しても押え切れない涙が二人の目に溢れた時は、

「お兄ちゃんが、天国から見ているから頑張ろうね」

「お兄ちゃんが、悲しむから泣かないで」

と言つて励まし合つてきた。この涙が枯れ果てる日があるとしたら、それはきつと私が天国である子と会えた時ではなからうか。

朝、目を覚ますと、とたんに洋行が私の心の中で動き出し、一日中私を占領していた。生前の洋行の、ほんの小さなしぐさ迄が、これ程鮮やかに思い出されるのは、あの子が私の心の中で生き続けている証ではあるまいか。生前は顔を見ない日や、声を聞かない日が多く、時々、

「今頃は、何をしているのかなあ、食事は満足にとつているだろうか。睡眠不足で体をこわさなければよいが」程度に考えていたのに、亡くなってからは毎日あの子の良い所ばかりが思い出されて胸がしめつけられる。

死の悲しみをよそに、ソウルオリンピックが開催され、テレビを賑わしていたが、勿論私の頭には、テレビを見たり新聞や本を読む気持ちは全くなかった。頭の中には、洋行の死のショックで完全にパニック状態であった。

しかし人の心も無常である。少しづつ頭の中を整理しはじめてきた時、何故、事故が起きてしまったのか、それを知りたい気持ちが泉の様に沸き上がってきたのである。

## 心の迷い

事故については、新聞と一部の学生の話以外、詳しい事情は全く分からなかった

た。何故事故は起きたのか、ハンドル操作を誤ったのは確實であつたとしても、それには何か原因があつたのではないだろうか。もし事故プラスアルファがあつたとしたら等、サスペンシ的な事を色々と考えた時であつた。

運悪く運転席側が、水につかる様な形で落ちたとしても水深五十センチで水死とは……。しかし助手席に乗っていた学生が、かすり傷程度で助かつた事が私達のせめてもの救いであつた。洋行も、水さえ飲まなければかすり傷程度であつたのに。

この頃から私の心の中に少しづつ、悪魔の心が住みつきはじめたのである。悪路走行練習に怒りを感じたり、二年連続優勝に有頂天になりすぎて過度な練習をしていたのではないか、健康チェックはしていたのだろうか、何故、車にロールバーを取り付けて練習してくれなかつたのか等が、今更ながら悔まれた。悲しい事に、事故が起きてから、安全確保に乗りだすのが人の常である。数人の友人の話によると、ラリー練習の二三日前から、洋行は体調を崩していたらしい。あん

なに好きなラリー練習に「行きたくないなあ」と漏らしていたことが分かった。それから考えても、大分体の調子が悪かったにちがいない。しかし、新人特訓の練習とあつて、自分の責任を果たす為に、無理して参加したのであるうか、。

悪魔の囁きは日ごとに増し、何故洋行だけがこんな目に合わなければならなかったのかと人を恨み、憎悪の気持ちで一杯になった時もあった、今迄見たくなかった交通事故死の欄を荘然と眺めながら、他人が不幸になると自分の気持ちを理解してくれる仲間が又一人増えた様な気分になったのである。これは、まさに狂気に近い醜い心のなにもでもなかった。

心の迷いは、そう簡単には消えそうもなく、私の心の葛藤が続いた。無念の思いが私の心を益々狂わせ、我が子の死を他人のせいにしよとする醜い悪魔の様な心が、根強く居座ってしまったのであった。この頃の私には、友人や知人の温かい慰めも、すべてが空しく感じられ、どんな言葉も我が子を失った極限の悲しみを、埋める事は出来なかったのである。



## 揺れる心

半月程経った頃から、私は次第に人目を避ける様になって来ていた。知人に出会った時、洋行の死を涙で訴えたい気持ちと、逆に逃げ隠れたい気持ちとが交錯して、複雑な心境であつた。

可哀相な弱者だと見られる事で、まるで蟻の様に小さくなっていく自分が無残であつた。日増しに、世問の人が煩わしく感じられる様になってきたのである。

歯を食いしぼり、涙を隠して、出来るだけ人に会わない時間を選んで、外出した。最初は素直に、知人からの慰めの言葉を受け入れる事が出来た筈なのに、次第にひねくれた気持ちに変わってきたのである。それは私があまりにも神経過敏になつてきた事を意味していた。慰めの言葉の一つ一つに、私の心は和らぎもしたが或時は逆に苦痛を感じる時さえあつた。

私もかつて、不幸を味わった人達に、月並の慰めの言葉をかけてきた。しかし、どれだけ相手の心の痛手を理解してあげたであろうか。今初めて、不幸を経験してみても分かったのである。どんな言葉も、愛する者を失った心の痛みを、完全に理める事は出来ないということ……。

悲しみは、時間が解決してくれると人は言うが、胸が張り裂ける様な辛い逆縁の悲しみを味わった私にとっては、時間が解決してくれる等という生易しいものではなかった。時間が経てば経つ程、二十一年間の思い出が頭の中を<sup>よ</sup>過ぎり、悲しみは増すばかりであった。

私の心の様に、揺れ動くろうそくの炎と線香の前で、遺影を見つめている私の心は、冷たくひえ切っていた。洋行の死を運命と呼ぶならば、神様は大変な意地悪だ。二十一歳の若い命の変りに、何故私の命をお取りになって下さらなかったのですか。

## 遺品

部屋の片隅に積まれた、アパートから持って来たダンボールの整理は、とても辛く悲しい仕事であった。台所用品の一つ一つを見ても、我が子の匂いがして息が詰まる思いがした。

「ああ、この食器はついこの間、紙袋に入れて持たせてあげたばかりなのに……」  
炊飯器、トースター、鍋、コップ等々、皆懐かしいものばかりであった。それらは洋行の遺品として、特に大切に私がそのまま引き続き使う事にした。

衣類の入ったタンボールの中身は、特に思い出の多い物ばかりだった。洋行が好んでよく着ていたスポーツシャツ、Ｔシャツ、トレーナー、セーター、ズボン等、一つ一つを手に取り頬に当てながら、生前の姿を思い出していた。あの子は、時々私にアイロンのかけかたに注文をつけた事があったのに。それも皆悲しい思

い出の一つとなってしまうとは……。

衣類はすべて洋行が何時帰って来てもすぐ着れる様にと、洗濯をし、丁寧にアイロンがけもし、ナフタリンを入れて収納した。勿論、取れたボタンは涙で曇った目でしっかりと取り付けた。何時の日か、ひよっこり現れて着てくれる事を願いながら。

紺地に小さい模様の入ったネクタイは、一年半前の大学の入学式と、亡くなった年の成人式のたった二度だけ結んだ、懐かしい遺品である。照れくさそうに着ていた背広姿の洋行と、それを満足気に見ていた私の姿が鮮やかに甦ってきた。靴やズックはすべて大切な遺品として取って置くことにした。あの子の部屋に入ると、きれいに整理された遺品や、高校迄使っていた机、生前読んでいた本、そしてあの子がカタログ販売で買った安楽椅子。その椅子にもたれながら好きな音楽を聞いたり、本を読んでいた姿が目の前にちらちらして来る。

まだ心のどこかで、洋行の死が信じられなかった。姿、形は無くても、洋行は

鮮明に私の心の中で生き続けている。机の上のりんどうの花が、私をまるで哀れんでいるかの様に見えた。

## 八月に戻りたい

或る日、千鶴が遺影の前で私にポツリとこう言ったのである。

「八月に戻りたい」

と。八月は洋行が元気で生きていた頃であった。娘も又、小さな胸を痛めていたのか……。

洋行が亡くなる一カ月前の八月は、例年通り私は子供達二人と、佐渡でお盆の手伝いをしていた。生花店を営んでいる実家は、お盆は特に猫の手も貸りたい程の忙しさであった。

私と千鶴は市場、洋行は得意先への花の配達であった。特にこの夏は、洋行に

とって車での配達が多く、事故を起こさなければよいがと、心配は尽きなかった。半袖のＴシャツを肩まで捲り上げて、汗を拭き拭き働いていた洋行の姿が、目の前にはつきり浮かび上がる。あの時は幸せであったのに。私だって、出来たら八月に戻りたい。タイムトンネルをくぐって、過去の世界に戻れたら、思い切りあの子とおしゃべりし、穴のあく迄あの子の姿を見てこよう。

特に千鶴にとつて、この八月は洋行と話す機会が多かつたらしく、八月の思い出が千鶴の頭の中に、ズツシリと詰まっていたのであろう。

八月十五日は、私のクラス会があり、洋行の運転で集合場所迄送ってもらったのである。その夜、私が帰る迄千鶴は寝ながら、洋行と色々な話をしたと言う。

「お兄ちゃんが怖い話をしてやろうかと言って、色々な話をしてくれて、面白かったなあ……」

と思ひ出す様に話す。

私と千鶴の心は、今一つとなつて遺影を見つめながら、「八月に戻りたい」と心

の中で叫んでいた。今でも学校から帰ると、この言葉を繰り返している。この言葉は、千鶴の心から一生消え去る事なく、天国にいる洋行に向かって叫び続けることだろう。

## 青春のビデオ

十月十六日、自動車部員の板橋君、河西君ら六人の学生が、八月に宇都宮で開催された、第二十七回関東甲信越学生自動車連盟競技大会でのビデオを、持って来て下さった。二年連続総合優勝に輝いた長岡技術科学大学自動車部の活躍振りが、きれいに撮れていた。

デイルリー、ナイトラリー、ダートトライアルの三種目のうち、洋行はデイルリーとダートトライアルに参加していた。出場前のリラックスしたひょうきんな姿に比べ、デイルリー発車寸前では、緊張感が顔が少しこわばっていた。ストツ

プウォッチを首から下げてハンドルを握っていた洋行のありし日の姿、ダートトリアルでは、ゼッケン二十三番を付けて健闘していた姿に胸がいっぱいになった。

このような洋行の姿を、私はビデオで初めて見たのであった、私に心配掛けさせないようにと、一度もラリーの練習をしていた事を話さなかった。交通事故をそんなに心配していた私にとって、練習中の事故死は大きな落とし穴であり、母親失格であった事が悔まれた。

毎日、日が西の空に沈む頃、私の淋しさは募り、洋行に無性に会いたくなる。そんな時、ビデオは私の心の助け船になってくれた。人はよく「ビデオを見ると尚、辛くなるんじゃないの」と言われる。確かにそうとも言えた、しかし今の私にとっては、唯一の動きのある洋行の生前の自然な姿であった。しかも、ほんのちよっぴりではあるが、あの子の口から「ヨーシ」という言葉が聞こえた。

青春をラリーに賭けた洋行の真剣な運転姿を見ていると、遂、私迄が画面に吸



い込まれ、洋行と一体となってハンドルを握っている錯覚に陥る事がある。

運転の出来ない私にとって、ラリー等過激なスポーツは嫌いであった。しかし、人の心は不思議なもので、私は洋行の死によって、自動車部を理解出来るようになり、男のラリーへの憧れが納得出来るようになっていた。

偶然とはいえ、このビデオには洋行が数多く、はつきりと写っていた。その場面を、スローで見たり、一コマ、一コマ送っては、食い入るように見つめていた。今にして思えば、自分の一番愛した車と共に、男のロマンであるラリー練習中に逝った事は、幸せなのかも知れない。

## 秋晴れの四十九日

多忙の中を時間を割いては、線香をあげに来て下さったり、兄を失った千鶴の為に、高校の学園祭迄見に来て下さったり、技大生の温かい心に支えられながら、

私達家族は悲しみのうちにも一日一日が過ぎていった。

そして十一月一日の四十九日は、この季節には珍しい秋晴れの暖かい一日であった。午前十一時から法要が営まれ、その後は予定していた通り、小千谷の現場でもお経を讀んでいただく事になっていた。技大からは、波多野君、横山君そして南高の友人である板垣君が来て下さった。雲一つない青空の下、高速道路を四台の車はひた走り、現場に到着したのは午後二時頃であった。

この小さな小千谷の山は、何事もなかったかの様に静まりかえっていた。その静寂の中で、川の流れと時折り囀る鳥の声だけが聞こえていた。紅葉も終わり、冬仕度に身を包んだ山の木々が、秋晴れの青空に戸惑っているかの様に感じられる中を、読経の音が静かに響きわたっていった。何度来ても、現場を見る度に無念の涙が体の底から込み上げてきて止まらなかった。

現場には、自動車部員達が駆けつけて合掌して下さった。これで洋行も、安らかに眠る事が出来るであろう。ろうそくの炎と線香の煙が、この小千谷の山あい

に、吸い込まれていった。もうすぐこの山も、雪一色に包まれ、長い冬が訪れることだろう。

## 洋行の夢

十二月二十二日は、洋行の百日目の日であった。辛くて悲しい日が百日続いた事になる。しかし今もあの子が、長岡のアパートから元気に大学に通っている様な気がしてならなかった。

その時、玄関のチャイムが鳴った。親友の嶋陽二郎君であった。百日目をちゃんと覚えていて駆けつけてくれたとは、私の顔に笑顔が戻っていた。今日で試験が終わり、明日から冬休みに入るといふ、二時間しか眠っていないという彼は、実家から送られてきたというＬＬサイズの和歌山ミカンを、洋行に供えて下さった。

何時だったか、洋行と一緒に我が家に来てくれた彼とは、夕食を共にした事があつたが、和やかで、口数の少ない彼は、洋行と気が合つたらしい。

その嶋君と夏休みに北海道旅行に行きたがつていた洋行。しかし、フェリーの切符が取れなかつた事と、金欠病が重なりその夢も果たさず、洋行は遠い所へ旅立つてしまった。あの時、無理してでも北海道旅行にやらせてあげればよかつたと、後悔するばかりであつた。

明日ありと思ふ心のあだ桜

夜半にあらしの吹かぬものは

という歌が思い出された。高校時代から、洋行は何故か北海道に憧れていた。特にあの幻想的な雪祭を見たかつたようである。

もう一つの夢は、嶋君の実家である兵庫県へ行く事だつた。

「ことは二人で、僕の実家へ行く事になつていたのに……」

彼がポツリと私に話してくれた。この二つの夢は、何時かきつとかなえてあげ

たい。

もう一つ、こんな大きな夢があった。亡くなる二ヶ月位前の頃だった。

「俺、将来、脱税して何かでつかい仕事をして、親孝行するよ」

「あれ、脱税でなくて脱サラでしょ」

「あつ、そうだった。アツハツハツハツ、ハツハツハツハツ……」

ひっくりかえって、足をバタバタさせて転げまわって笑っていた洋行。そう言えば、昔から、そそっかしい子であった。あまりにも可笑しくて、二人で涙が出るくらい笑った事があった。

## 雪の足跡

十二月二十三日、学校が休みになった娘と二人で、高速バスを利用して小千谷迄行ってこようと思いたった。

雪の多い小千谷の現場は、雪解けも遅く、三月下旬頃になるだろう。その前にもう一度花を供えて来たかったのである。初めて乗った高速バスで長岡に着いた私達は、そこから電車で小千谷へと向かった。小千谷に近づくに連れて、うっすらと積もった雪が窓を通して見えはじめてきた。平地でこの位なら、山はどんなに積もっている事だろう。しかし今更、引つ返す訳にはいかなかった。何としても現場に辿り着きたい。行ける所迄行こうと心に決めていた。

魚沼タクシーで現場に向かった私達は、山の入り口迄来た時、現場迄はとも車で行けない事を知った。

「お客さん、もう此処から先は車が走れませんよ、諦めて下さいな」と言われるものと思っていたのに、

「お客さん、車を此処に置いて歩いて現場迄行きましょう。私が長靴で道をつけてあげますから、私の足跡に着いて来て下さい」

と言う温かい言葉だった。この場に於てこれ程嬉しい事はなかった。この様な心

の温かい親切な方に、小千谷でお会いする事が出来たのも、洋行が私達に残して行ってくれた新しい出会いであったのか。

運転席の左側に、北原武と書いてあった。この名前をしっかりと頭に刻みながら、長靴の足跡の上をしっかりと伝わって歩いて行った。三人の足跡は一つとなつて長く続いていた。

新潟は全くの雪無しで良い天気であり、長岡も雪が無いとのことで、千鶴は短い靴、そして私もハイヒール姿であった。何度かヒールが雪に埋もれ、手で靴を引き抜かねばならなかった。足が冷たくなるのが当然である筈なのに、不思議な事に二人とも全く冷たく感じなかった。それはきっと、運転手さんの温かい心が、二人の足を温かく包んでくれたからではないだろうか。

現場に着いた時は、体中がほかほか温かく、私の心も爽やかであった。折りからの太陽の日差しをあびて現場の雪は、きらきら輝き、辺りは静まりかえっていた。雪の上に花束を差して合掌していると、あの日が思い出され、涙の滴が白菊

の上に落ちていった。私は雪の上に人差し指で大きく「井上洋行」と書いて現場を後にした。

運転手さんとの出会いがなかったら、二人は現場迄とても行けなかった。車中、「ああ、来て良かった」という思いで、娘と目を合わせ微笑んだ。極限の苦しみを味わった私にとって、人の情け程、心の痛手を救ってくれるものはなかった。

### 長岡と聞くだけで

長岡と聞くだけで、又長岡の二文字を見るだけで私の心は痛み、胸がしめつけられる様な気分になされた。小千谷という言葉も同様であった。気にすればする程、その二つの言葉は、前後左右から、まるで私を追い掛けるかの様に襲ってきた。

平成元年となり、大学受験生が東西南北を奔走する、いつもの受験戦争のシー



ズンとなった。平成元年二月二十八日、長岡技術科学大学の二次試験の様子が夕刊に大きく載っていた。目をつぶりたい様な、それでいて気になる様な複雑な心境でそれを眺めた。

二年前、洋行もこの二次試験に挑戦していたのに……。あの時の小論文に、洋行はどんな事を書いたのだろう。そして面接には何を話したのだろうか。大学、共通一次、この言葉も私の頭から離れない悲しい言葉となってしまった。

昭和六十二年三月十四日の夕刊に、長岡技術大の合格発表が掲載され、私達家族は、有頂天になって喜んでいた。それなのに六十三年九月十四日の夕刊には、事故死として大きく載り私達を奈落の底に突き落としてしまった。全く偶然とはいえ、同じ十四日の夕刊に載るとは……。そして一年半の大学生活に幕を下ろすはめとなった。

長岡は、あの子の短い青春時代を過ごした最後の場所であり、小さな故郷ふるさとであった。私も何時の日か、素直な気持ちで長岡を受け止める事が出来る日が来るだ

る。

合格祝いに戴いた桜の木に、今年は何輪の花が咲いてくれるであろうか。

## セカンド・バッグ

何処へ行くにも手放さなかったというあのセカンドバッグが、事故以来今だに見つかっていない。洋行の大切な遺品として、どうしても捜し出したかったのだが。

あのバッグには、何が入っていたのだろうか。多分、今なお見つからない運転免許証、キャッシュカード、通帳、印鑑、テレホンカード、住所録等ではなかったのか。

あの時、水深五十センチで流されてしまったのか。しかし私は、どうしても不思議でならない。あの遺影に使った写真は、丁度事故の時に、車の中に四、五枚

の写真と一緒に、小さなセロハンの紙袋に入れてギアの横にあったと学生が言っていた。そうだとしたら何故あんなに軽くて小さな写真が、流されずにあり、セカンドバッグが流されてしまったのだろうか。私にはとても偶然として片づけてしまう気持ちにはなれなかった。

どうしても、あのバッグを見つけ出したい。その気持ちが私の頭から離れない。

## 『YOU』

あんなに探し求めていた昭和五十九年の秋、放映された新潟版の『YOU』のビデオが、思いがけず、こんなにも身近な人が持っていたとは。

三月十五日、南高校の親友であった剛君と正隆君が久し振りに洋行に会いに来てくれた。お線香の立ち込める中で、あのお通夜の日、棺の中に入っていた尾瀬の写真は、やはり剛君が入れてくれたものだと分かった。尾瀬の話から甲子園の

話へ、そして「YOU」へと五十九年度は南高校にとっても洋行にとっても、本当に充実した一年であった。

「YOUのビデオ搜してるんだけど、なかなか手に入らなくて……」

「えっ、ビデオ持ってなかったんですか？井上は持ってるんじゃないかと思ったのに」

「剛君、あなたその時のビデオ持ってるの？」

「はい、持ってます。あの時NHKから、井上がスタジオに友人二人迄連れて来ていいと言われ、僕ともう一人の友人が誘われたんです」

「えっ、本当、すごく嬉しい！あんなに搜していたのに。剛君、あなたが持っていてくれたなんて、ダビングして下さいね。ラジオを通してビデオを持ってる人を捜してもらおうかとも思ってたのよ」

「ダビングして持って来ます」

「ありがとう、剛君。本当に嬉しいわ」

そう言えば四年半前、学校から帰った洋行が顔を紅潮させ、

「俺、今日バスの中でNHKの人に写されたんだ。ほら、俺の好きな『YOU』という番組」

「えっ、本当？　そしてどうしたの」

「うん、それが傑作なんだ。バスが揺れた時、そのはずみで女子高校生が、俺に抱きついてくるところなんだ」

「あーら、面白いところ写されたのね」

「うん、テーマは『通学路の秘かな楽しみ』っていうんだ」

数日後、NHKのスタジオに来て欲しいという電話があった。すっかり忘れていたが、その時剛君も誘ったとあの子が言っていたのに。何故忘れていたのだろう。彼さえ思い出していたら、もっと早くビデオの中の洋行に会えたのに。

翌日、早速ダビングして持って来てくれたビデオテープをしつかり握りしめながら、体中が熱くなるのを感じた。テープの箱には『通学路の秘かな楽しみ』――  
二三、出演、井上洋行と、ワープロではっきりと打たれていた、剛君が打つてく

れたワープロの字をじっと見つめていると、彼の友情がひしひしと伝わってきて嬉しかった。

その晩、私達は高鳴る胸を押えながら、懐かしい『YOU』に見入っていた。あの軽快なテーマソングが流れ、糸井さんが入院の為、岸部シローさんがピンチヒッターで出演していた。あの当時、家族四人で、テレビを見て笑い合っていたのに……。

私の大好きだった高校時代の洋行の姿を動きあり、声ありのビデオで会うことが出来、私達は興奮のあまり洋行が写る度に、

「ほら、洋行が写ってる」と声を上げて喜んだ。ビデオの中の洋行は終始恥すかしそうに、時々照れ笑いしながらも、質問されると落ち着いて答えていた。本当に懐かしいビデオであった。

今にも、画面から飛び出してきそうな、そんな気がして……。そしたら、洋行の好きなヒレカツ、ハンバーグ、エビピラフ、貝の味噌汁を作って食べさせよう。

あれも話そう、これも話したい。

急に我が家に笑いが戻ってきた。底抜けに明るくあの洋行の笑い声がする。半ば、かすれた、体の底から笑っている、あの何ともいえない笑い声が……。

## 卒業生との別れ

平成元年三月二十三日、二十五日の卒業式を控えていたM二の森野さん、斉藤さん、杉田さん、唐木さんが四年生の小野さんと一緒に洋行に会いに来て下さった。卒業し、それぞれの職場へと巣立っていく四人の姿は、まさに青年の躍動そのものであり、日本をいや世界をも背負っていく若い力が漲っていた。

県外生の四人の学生とは、こんど又何時の日かお会い出来る日が訪れるだろうか。これが最後の別れとなるかも知れない。お互い、遠い空の下で、それぞれの仕事につき、学生の時のような時間は持てないだろう。洋行も生きていてくれた

ら、四年後にM二を卒業することになったのに……。そんな思いで、卒業を目前にした四人の晴れ姿を眺めていた。卒業する先輩達と洋行の最後の別れになるかも知れない、そんな思いの中で卒業を祝い合った。

事故の時、人工呼吸、心臓マッサージをして下さった森野さんをはじめ、先輩達には、感謝の気持ちでいっぱいだった。

十年後、もし彼等達にお会い出来る日が訪れたとしたら、どんなに立派になられていることだろう。そして洋行の記念樹の桜の木も、彼等に負けず大きく育ち、私達家族の目を楽しませてくれることだろう。

六日後の二十九日、森野さんからお礼のお手紙が届き、その中に、大学、自動車部OBに内容報告の為に作成された転落事故に関する報告書と、自動車部の活動、運営に関する報告書が同封されていた。

転落事故に関する報告書によって、事故から半年経った今、私は初めて事故の詳細い内書を知ったのである。



## 生と死

人は何時の日か必ず死に直面する。それが早く来る人も遅く来る人もいる。それは生きている証であり、永久不変でない証でもある。千変万化の世の中、きょうの私は昨日の私ではなかった。我が子の事故死に遭遇して以来、私の心も目まぐるしい変動の中を通り過ぎてきた。

錯乱した頭の中で、励ましの言葉を素直に受け入れ、涙した日々、いつその事、死んでしまおうと馬鹿な事を考えた時もあった。或時は、ひねくれて醜い心に惑わされ、どんな慰めの言葉も空しく感じられ、心の葛藤が続いた時もあった。これは、麻疹の様なもので、一度は通らねばならない悲しい人の性さがではないだろうか。

しかしそこを乗り越え、私が立ち直る事が出来たのは、人の情けと温かい心に

触れ、そして又自動車部員の大きな励ましの助け船があったからである。

どんな慰めの言葉も、愛する者を失った痛手を埋める事は出来ないが、それを土台にして、自分で立ち直る道を見つけ出さねばならない事を、いやという程知らされたのである。

初七日を過ぎた頃であろうか、心の動揺が最大に達していた時、

「人に惑わされず、真実を見つめて、真実に向かって生きて行く事」

と言われたご住職さんの言葉が、大黒柱の様に私を支えてくれたのである。

今まで、生と死を真剣に考えた事もなく、生きている事を当り前と考え、命の大切さを見失いかけていた私達家族に、我が子の死は一つの警告を發したのだ。生きていくうちには、悲しくて辛い事も数多いが、それだからこそ手に握り切れない程の喜びも多い。

## 若者達へ

交通死急増の今日、命の大切さを知らない若者の無軌道さが死を招く事故は多い。この世でたった一つのかけがえのない命、親から戴いた尊い命を無駄にしてはいけない。一秒の心の油断、一秒の判断ミスで美しい花を咲かせずに散ってしまふのは、誠に残念である。

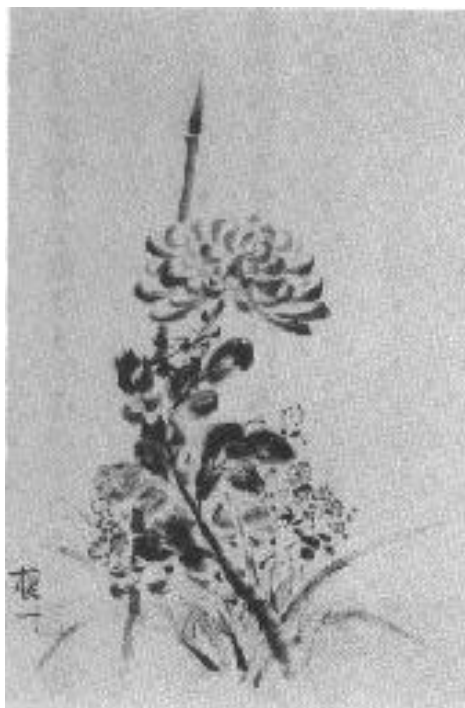
あなたを愛している両親、恋人そして友人の残された人が味わねばならない、想像に絶する深い悲しみがあることを知って欲しい。

厳冬の中を列を作り大空高く飛んでいく白鳥の一羽でも欠けたならば、その列はどうなるだろうか。交通事故の悲劇が平凡な幸せな家庭を一瞬にして闇の中に突き落としてしまう事も忘れないで欲しい。

極限の悲しみに直面し、悲しみをドン底迄味わってしまった私が、若者達に声

を大にして言いたいことは、『たった一つの命』を大切にして欲しいということである。あなたの『命』は、決してあなただけの命ではない事を知って欲しい。

第二章  
残された日記



## 一、残された日記

押し入れを整理していた私は、一冊のノートを見つけた。それは洋行が昭和五十八年から、五十九年にかけて記していた掛け替えのない、高校一年の時の日記帳であった。

私の胸は、手鞠の様に弾みながら、どんな小さな事でも、あの子についての事は、何でも知りたい心境で一気に読み上げた。そして何度も読み返しては悦に入っていたのである。つい笑いが出てくる程、楽しく、面白い日記であった。

「お母さん、お兄ちゃん私のことも書いてあるわ」

「すごく面白い日記ね。お母さんのことも、いっぱい書いてあるわよ。特にバレンタインデーのチョコの件、ウフフ……歯が痛くなったのね。何も知らなかった

……」

「お兄ちゃんて意外にロマンチックなところがあったのね」  
「うん、お母さんも知らなかった。理数系で文学的素質は何もないと思っていたのね」

五十八年十一月二十七日(日)

これは、今迄やろうやろうと思ってやらなかった日記というものだ。とうとうはじめることが出来た。というのも、今日は珍しく居眠りをしなかったからともいえる。兎に角、三日坊主にならんよう頑張りたい。

今日は日曜で皆家に居たけど、妹は午前中そろばんの試験、午後バドミントンの試合観戦ということで、わりと忙しかったらしい。父様は出かけたし、母様は飯作ったり、買物行ったりで、ごく普通。

俺はというと、午前九時十一分に起き、ろくに勉強もせんでぼわーとしてた。もうすぐ期末考査なのに、大丈夫なのでしょう。心配です。きのうは先生に怒

られたし、バス停で十五分も雨の中に立ってたし、ついてなかった。やっぱり日曜は最高や！

ところで、我が愛するA子さんは元気でおられるだろうか。かぜをひかないように……。あと何かないかな……。あー眠てーのー。高校つてーのもらくじゃねいなあ、くそ、今日は、寝る前に昔のYMOのライブを聞いて寝るかな。

それじゃ、もう一人の洋行君、お休みなんしょ。

## 十二月四日(日)

最近、テスト勉強で忙しいので、期末考査が終わる迄日記は休もうと思ってるが、今日はなんだか書きたくなったので短いけど書く。

えー、今日母さんと、父さんを、この前俺が学校で友達にやられたのをを使って騙した。とても面白かった。やったぜー。

それから、今日マラソンで瀬古選手が一位になった。すごい。

でもって、数学の演習問題をやったが、殆どわからずマイコーチに頼ってしま



った。でもちゃんと納得した。それで、最後の一案はマイコーチに頼らず自分の力でやったら、解けたのもものすごく嬉しかった。

しかし辛いね。早く冬休みになあれ。俺はクリスマスがとても好きだ。

今年のクリスマス、雪が降って欲しい……。

十二月二十日（火）

今日、午前中雪が少し降った。外は十七日から降り出した雪で覆われている。（でも又少し溶け出したが）

今日、母さんはガンセンターへ行った。胃カメラの方は大丈夫だったそうだ。それにしても、まだ頭痛は治らんのかな。はやく治ればいいのに。

で、今日は久々にA子が家へ来た。ちっとも変ってない。

しかし、どうして俺は女の子としゃべるのが下手なのだろう。会話が跡切れたりしてまずい。まいいか、そんな、まだ親密な仲でないものな。こうしている間が一番良いのかもしれないしな。

十七日に、ヘッドフォンラバイの続き物二冊かってきた。二日で二冊読み終わってしまった。すごく面白いと思う。

俺は想像力が豊かなのか本を読むと、ぱっぱとその情景が頭に浮かぶ。本当に心が、じんわりとしてくる。んじゃ。

十二月二十一日(水)

今日は、十一時前に起きた。これといって変わった事はないが、ガムの食い過ぎで歯が痛くてたまらん。

ズキズキする、かー痛て！

十二月二十二日(木)

今日は、ありきたりな一日だった。なーんも面白いことなかった。勉強もろくにしなかった。やる気がないんだ。俺テストが終わる迄、勉強ノイローゼになつてたからな。こりゃあ一週間は治りそうにない。自分では(勉強しなくちゃ)と思っただけど、いざ机に向かうと気が散ってしまう。

集中力を使い果たしたかな。今のうちに充電しとかなくちゃ。

しかし高校つてのは大変だね。ほんと。勉強なんて嫌いだな。えっ？そ、これ本心だよ。勉強好きでやってる奴なんか恨めしいね。まったく。

でもだいたいそういう奴は、マザコンだったりしてね。デパートなんかにお母さんと一緒にくっついて買物したり、そのお母さんてのは、30度位、角度のついたきつい形の眼鏡をかけて、着物きて、「ソーザマス」なんて言っているような。うー嫌なタイプ。それに比べりゃうちの母さんは、まだましなのかもな。なんか目が冴えてきしまった。

あーあ、高校つてこんなつまらんものなのかな、やっぱ、勉強が苦しくのしかかってくるからだな。ひー。卒業する迄、ノイローゼでのたれ死にしないことを願おう。

あまり家に籠ってばかりいてもノイローゼになっちまうな。明日は、柴沢と映画を観に行くし、いい気分転換になりそうだ（勉強もろくにしてないのに）ウオ

ークマン持って行こう。

あーあ、早く一人で下宿生活を送りたい。好きかって出来そうだしな。貧乏でも、それまた楽しくやってけそうだし。

あつ、その前に勉強、勉強。それじゃおやすみ。

十二月二十三日（金）

イエーイ！今日は柴沢とキャノンボール をみて来たぜ。なかなか良かったね。だけど、いまいちカーアクションに足りない所があった。で、ウインターローズ、あれは俺もうそんな見る気なかったし、

どうせなら、英語と字幕で勉強しようと思ったけど、何気なく見ているうちに話の中に入っちゃった。それがまあ、感動するのなんのって、もう少しで泣くところだったぜ。まじに。ほんとにアンドリューの気持ち分かるようだった。可哀相なアンドリュー。ふえ。

それから、ローサでミカのバッグを買ったし、“あぼろん”でMM ーCを買っ

た。早速、多重録音を試してみた。きよしこの夜とコンドルが飛んで来たをちよいと。

しかし今日は風が強くて寒かった。でもま、いいやA子の声聞いたし、おやすみ。

十二月二十四日(土)

メリークリスマス！今日は、クリスマスイヴ、好きだな俺この日、ロマンチックでさ、何か今こう、何というか、胸がじーンとしている。何かしんみりと、空想の世界では黎と有沙が楽しそうに、そして十年前の東京に今僕はいて、RCのハードフォークを聴いている。何故かウォークマンで、そして何時の間にか僕は、黎になっている。

三宿のマンションで下宿生活、狭い部屋だけど楽しいこの部屋へはどんな人が来ただろう。吉井、安藤、有沙、小笠原、善美、朋、唯、なっつ、ガス屋のおばさん……。

このマンションは、わりと静かな所にある。小さい頃、真理と散歩した三宿川の川原が見える。

ああ、本当に楽しい。もっと自由に、自由に生きられたら……。

ああ、現実には空しい。

十二月二十七日（火）

あーあ、日記つけるの忘れてた、やーべ。今日はまた寒かった。昨日は星野さんが来たよ。千鶴は二十五日“みゆき”のゲーム買ってきてさ、皆でやった。今年もあと四日で終わりか……。なんか空しい。

今日A子が遊びに来た。彼女Mrドーナツからいろんなの買って来てくれた。嬉し。

あーあ、何んか空しいからもう書かない（今日は）

十二月二十八日（水）

今日千鶴の誕生会があった。お陰で今年のクリスマスはありつけなかった生ク

リームのケーキを食べることができた。さすが、生クリームはうまい！ケーキはソーダ水とよくあう。

あとは、え、俺のくつした皆、穴あいてしまった。なんのこっちゃ。

あーあ、早く高校卒業して大学生になりたい。でも受験はやらし、気がついたら大学に入学してたとか……。無理なこった。

大学へ入ったら、一人で下宿しよう。じゃおやすみ。ラーバンドは最高！！

十二月二十九日（木）

今日、とても面白いというか楽しい夢を見た。何故か中学校に卓球をしに行くんだけど、実はこれから行くという時に、母さんが起こしに来て夢がさめちゃった訳。

そして俺はどうしてもその先が見たかったから、もう一度寝ようとしたんだ。

そしたら今度は、ちょっと違う夢で、何というかバスに乗ろうとした夢！

夢、ゆめって不思議だね、現実で無理な事をかなえちゃうんだもん。しかも目

が覚めると、だいたい忘れちゃうもんな。

今夜も、楽しい夢見たいな。

十二月三十日(金)

今日は、寝坊してしまった。本当は早く起きて手伝いしようと思ったのに。明日は、今年最後の日だし、手伝いしなくちゃいけないから、六時三十分起床だから。もう寝させてもらうね。(といっても現在、AM一時五十分)

十二月三十一日(土)

今年も今日で終わりです。今年は本当にいろんな事があった。

高校は、南高に合格、そしてシンセイサイザーを買ったし、そしてとうとうYMO、イエローマジックオーケストラが解散、いや解散してしまった。本当に思い出せばいろんな事があった。

俺、遂に一学期、二学期とも組席次が一番だった。最初はやったぜーと思ったが、だんだん辛くなった。一番を保持しなくてはならんものなあ。プレッシャー



がかかるよ三学期は……。それに母さんが当然と思っても困るからなあ。

本当は、今はAM零時五十一分で一九八四年です。でも朝にならないと一九八四年になつた実感がないね。

とにかく一九八四年、僕にとって、皆にとってこの地球にとって良い年であります様に……。

五十九年一月一日(日)

あけましておめでとう。

今年もいい年であつて欲しいな。あつ、いや、今年は昨年よりずっと良い年であつて欲しいな、少し贅沢ぜいたくかな。

もうA子ねちゃつたかな、今年も仲良くやつていきます様に。

今日は、俺をぬかして皆、白山神社へ行つた。みやげ(?)にクレープを買つてきた。うまかつた。それから、やつぱりおぞう煮は最高に美味しい。うん。朝は餅二個、昼四個、夕一個食べた。

夕飯は、すきやきだった。美味しかったなあ。  
今年が良い年にするぞ！

一月三日（火）

しかし休みだと、のんびり出来て本当にいいけど、何も変わった事ないから、あまり書く事ないな。でも勉強したくないよー。

今日はいーと。

一月四日（水）

今日は、ほんとーに眠い。もう勉強してても、目がじわーと、涙が出そうなくらいせつない。

ああ、今日は一時前に寝よつと。布団に入ると何故か眠れない僕。

一月六日（金）

今日、吉田病院へ行って来た。尿検査は、みんな大丈夫だった。高田先生、もう直ったと言っていた。カー嬉しい！

それにしても小児科って他人の視線が気になる。だってあんな、ガキばかりいる中に、俺みてなのがいたら、そりゃ注目されるよ。恥かしい。でも又そこが面白かったりして。とにかく、体の方は直ったみたいだから、もう最高。

それにしても、あと二日で冬休みも終わりが……。昨日はA子の家へ行っだし、やっぱ可愛い。帰りに年賀状出すとかで郵便局迄、つきあつたんだけど、途中で雪が降ってきてさ、かさ俺しか持つてなくてね、あいあいがさになっちまった。そしたら俺の腕にくっついてきてさ、初めてだったから俺びっくりしたね。本当嬉しかった。「あつたかい」という言葉がなんだか心にしみてさ、いい気分だった。辺りはもう薄暗くて全く人気がないの。なんかこの世を俺達二人が独占してたような。又、あんなふうな日はあるかな。

一月七日(土)

なーんも面白い事あらへん。今の俺の楽しみは、夢だけだよ。最近、面白い夢ばかり見るんだ。今夜は、どんな夢を見るのかな。

一月八日（日）

今日で短かった冬休みも終わり、明日から又憂鬱な毎日が始まるのかと思うと淋しい。とにかく勉強がなきゃいいのに。

あーあ、小倉百人一首覚えられないよ。明日は学校終わったら、紀伊国屋へ行って本買ってこよつと。『ファーストスノウキッス』と『マイディアスウィート』の二冊と他にいいのあったら二冊位、とにかく窪田僚の本は面白いし、国語の駄目な俺は、こういう本でもいいから、本と親しまなくてはならないし、誰か誘って行こうかな。やっぱ一人で行こうかな。あっそうだ、ウォークマンの電池も買ってこなくつちゃ。で、関係ないけど、今日俺、床屋へ行ってきた。俺、床屋から帰って鏡見るの嫌いだ。

それじゃ、おやすみ

一月九日（月）

今日から憂鬱な三学期が始まった。ふーっ、疲れる。A子は南高のバスケのや

るうを、かつこいいというし、ちえ！ばかやるー。ふんだ、なんだってんだ。塾の先生がかつこいいだの、あいつ男の話ばつかじゃなか。へん、こんど浮気してやっかな、なんちってー。

一月十日（火）

今日は、僕にとって全くついていない日だった。学校にいと、ぼたぼた雪が降るし、その後は雨の為に、道なんか、ぐちゃぐちゃんで、バス待ってたら、電線から雪が頭に落ちてくるし、バスはひどく混んでるし、乗ろうとしたら、後のじじいが割り込んでくるし、バスを降りて道を歩いていたら、後から来た軽トラツクが水を思い切りひっかけていくし、びしょびしょになるし、もうさんざんな一日でした。明日は、いい事ありますよーに。

一月十一日（水）

今日A子からYMOを借りた。彼女は、プレイヤーの針がこわれて聴けないんだ。

それにしても恥をかいた。彼女のプレーヤーの針の値段調べてやったら、五千八百円（俺にしては最高！）だったんだ。んで彼女、驚いてたから俺、てつきり「金が足りないのかな」と思ってた。「お金貸したげようか」と言ったんだ。そしたら、お金はあるんだって！リッチなんだって、三万円もあるんだって。いーなあ。あいつお年玉に近くの親戚から貰ったんだな。俺はどうせ、一万円だもんな、近くに親戚おらんし、今は七千円しかない！

でも、貧乏でもいーもん！

一月十八日（水）

どうもご無沙汰してしまった。いけねえ！今日も又、寒かったな。朝は辛いよ、まったく。なんだか、最近テストやらなんやらで、暗くなりそうな毎日でさ。

こんな心を明るく温めてくれるのは窪田僚の小説ぐらいだな、きっと。あんな生活俺もしてみたい、なんてね。頭の中で想像力を働かせて、ヘッドスクリーンに映し出すんだ。何時の間にか俺は、その世界に入っていたりして、ちよつとセン

手になっちゃった。

最近は彼女もつれないし、何かむなしいね。だからせめて、ヘッドスクリーンに、楽しいことを映し出すんだ。落ち着くよ、ほんと。時には可笑しくて笑ったり、体じゅうで、どきどきしたり、鼓動が速くなったり、元に戻ったり、あっ！あっ！なんて、もう見てらんなくなったり……。

そう、俺の場合、小説なんか読むとその場の展開が、カラーでヘッドスクリーンに映し出されるから、むしろ、見るって感じの方が強くなったりするんだ。

明るいつて言うのが、暗いつてのが自分の性格がわかんない。

それじゃ、明るい事だけ考えて（それじゃ変かな）又明日！

一月二十日（金）

昨日は睡魔が僕を襲って日記書けなかった。それにしても多忙な毎日だなあ。

今日はスイートトリトル・フォーティーンを読んだ。とても良かった。この本の中で今んとこ一番良かった。でもまだ五つあるから、どうなるか、わかんないけ

ど。

学校へその本持って行って読んだけど、あまりよく読めない。石川ブーや、宮沢長官なんか脇から覗いて、声を出して読みやがんの。それも、俺がまだ読んでない所。石川はあの声なんとかならんのだろつか。壊れたラジオのひどい雑音みたいな、耳を通して、脳を思い切り響かせる声なんだこれが。俺の席はあいにく石川の前でさ。しかしいい奴なんだ。

後に、<sup>うしろ</sup>いや隣にMみか月でもいればな。Mみか月つてのは、その子の目が三日月を横にした様な楽しそうな目してるからなんだ。

その娘ね、飽きないよ見てて、髪型なんかもパンクがかったショートで、わりかし僕の好みだし、顔は何か変わった顔してるんだけど憎めないし、全く飽きないよ。笑うともう、どきつとする程可愛いらしくてさ。あんな娘、滅多にいないなきつと。性格も明るいよ、顔に比例して。でも理想は高そうだし、まして俺なんかを好きになる程、趣味悪くないだらうけど。



で、うちのクラスは、女子九人しかないしね。選べる程いない訳。

あれ、何んの話だったけな。それで俺もう本を教室で読むのはやめる。小説読んでる時のあの独特な気分を、あのクラスの馬鹿騒ぎでめちやくちやにされたくないしね。

本て不思議なもんだからな。本の中は字だけでなくて、読んだ人の心にだけ表われる世界があるからね。その世界は、人によって違うだろうけど。想像力の強い俺は、もうそういう意味で最高に満足出来たりするよ。(妄想力も、負けずとすごかったりして)暗いかな。

スイートリトル・フォーティーンの最後は、目尻が熱くなってきたな。その場の情景や、聖の臉に映ったるりの姿が鮮明に俺の想像箱イマジンボックスにうつし出されて、そのうち、俺と聖が一体となってるのに気づいた。辛かった。るりを俺のそばにいつも置きたい。

るりが歌っている……

俺がるりにプレゼントする箸のスイートトリトル・フォーティーンを……。

オレンジ色の光の中で……。

一月二十二日（日）

日曜だというのに、今日は六時三十分に起きなければならない。テストだったんだ今日。ろくに勉強していかなかったもんだから、遠い記憶を甦らせるしかなかった。きつと最悪だな、こりゃあ。

そのかわり、帰りのバスでA子に会った。久し振りに肩を並べて歩いた。RCのレコード貰ったりしてさ、いいのかな、本当に。A子、RC嫌いになったとか前に聞いたけど。ま、いいや、それより風邪ひいちゃって、喉が、ガラガラ、もう寝ようかな。月出てるかな、きつと出ていないな、だってこんなに寒いんだもん。お月様も風邪ひいて、ほの白い雲の布団に身を沈めてるな。きつと。

一月二十三日（月）

全くありきたりな一日だった。なんか楽しいことはないのかな。そういえば今

日学校で、Mさんと話しをしてしまった。なんて可愛いんだろう。あの笑顔がたまらなく俺を刺激するんだ。

彼女の席は、俺の左三つ目の席で、ちょっと横を向くとすぐ見えるんだ。横顔もたまらない、長いまつ毛に、パンクヘアー少し変った顔の形がたまらない。

あーあ、いいな、ああいう子！

一月二十四日（火）

最近俺、フォークギターが欲しくなってきたんだ。十年前のRCサクセションの「ハードフォーク」を毎日、寝る前に聴いているからかな。とにかく欲しくてたまらない。エレキギターも欲しいけど、まずは、フォークギターで。明日ギターの本買ってこよつと。

ところでA子元気だろうか。俺みたいに、咳ゲホゲホ、鼻水ズルズル、なんてなっていないといいけど。だってA子達そろそろ学校スキーがあるからな。あーあ、俺もスキーしたい。

実は明日かえってくる国語の宿題テスト、九十点以上だと、母親にギター代五千円寄付してくれることになってるんだ。あーギターが欲しい。

それじゃあ、ねよっか。

一月三十日(月)

なんと五日間も書きそこねてしまった。最近ほんと眠くて、もう強烈な睡魔に勝てないでいたんだ。

でも今日は、三時二十五分のバスに乗れたから機嫌がいい。

あと何んもいーこと、わりーことなかった。あーあ、平凡すぎやしない？俺って凡人？

二月八日(水)

しばらくのご無沙汰でした。何故かというところ、ここ数日間ずっと、AM零時頃から居眠りできて、もうやんなっちゃう。

その間いろんな事があった。でもなんか、パツとする事ないかな。雪ばっかり

降ってやんなるよ。通学に一時間かかるし、

アー腹へった。今日はこの辺で。

二月九日（木）

今なんか、生唾ばかり出て気持ち悪い！胸が、むかむかする。あー辛い。早く寝なくちゃ。

スノーピーの英語版早く読み終えなくちゃ……。あー辛い。

二月十五日（水）

あーあ、長い間、日記書かなかったなあ。駄目だな俺って。どうして机で眠っちゃうんだろう。好い加減にしたいよ。

今日は、一日中歯が痛くてもうまいったよ。歯が痛いからって昨日バレンタインデーに、女の子からチョコ貰ったという訳ではないんだ。いや、貰ったといえれば母親が哀れんでくれたけど、早い話がそのチョコにあたった訳。もう、ズキズキしてまいった。ああ、情け無い。

実は、この前の日曜日（十二日）、初めて、多重録音で音楽らしいものやったんだ。曲名は「銀河鉄道の夜」ま、初めてにしては良いと思う。

しかし困ったなあ、俺、A子がいながら、うちのクラスのMさんを好きになっちゃったらしい、大変だ。

だってちよつと変った顔してるけど、俺の理想にぴったり当てはまるんだもん。あの明るさは、A子にはないしな。笑顔が魅力的でさ。どうしても、教室にいるとMさんを追ってしまう。

でも彼女、理想が高そうだしな。俺なんかとてもつれないだろうし。ま、彼女は遠くから見ただけでも楽しくなる娘だしな。それでもいいか。そういう事。でも誰にも渡したくないしな。あーあ、憂鬱！

二月二十二日（水）

今日は、睡魔に勝つ事が出来たので、こうして日記が書ける。

バレンタインデーから八日たった今日、学校の帰りA子に会って、チヨコレー

トを買った。とても嬉しかった。おまけにスキー旅行のお土産まで買って来てくれた！ありがとう。これで俺、歯が痛くなければ最高なのだけだ。この前左の歯が痛くなつて、やっと治った（自然治癒）けどこんどは、右側ときた！もう良かった。

ああ、もうすぐ一年も終わりが。短かかったようだけど、思い返すといろんな事があつたな。それにしても俺、今度の期末考査大丈夫かなあ。何んか心配だなあ。最後だから頑張ろうと思うけど、なにしろ数学と理科、社会が大変なのだ。ま、仕方ないな。

明日は天気予報によると雨か。どんな雨なのかな。しばらく、雨とご無沙汰してるからな。久し振りに雨もいいかもな。でも道の雪が溶けて、ぐちゃぐちゃになると困るな。まあ、春が近いということだから、べつに気にしないけど、春は、やっぱり最高だな。

あー眠い、それじゃあね。おやすみ。

三月七日

やっと今日で期末考査が終わった。もうどつと疲れが出て、フーッ。

疲れてるにもかかわらず、早速、柴沢とくりだした。しかし折角俺達がテスト終わって、自由になった日にダイエー、紀伊国屋が休みなんだっ！ちくしよめ、

でも今日は、テープをダビングしてくれる店行ってYMOのアフターサービス、エポのハイタッチ、ハイテックをダビングしてきたし、やみつきになりそっ！

明日は卒業式だけど俺行かなきゃならない。クラスの代表として、ま、いいけどさ。だってもう一人はYさんだもん。Yさんは、美人でもなく可愛いともいえないけど、(本人ごめん)なんとなく好きなんだよな、性格が。明日くどいちゃおかな、なんちゃって。

とにかく、疲れが出て眠いわ。この春休みは楽しいものになるといいな。そして長いといいな、終わりが無いといいのに……。

三月十三日



全くつまらんな。何んか、ぱあーっと面白い事ないかな。

今日は、星野さんが来たけど、そのおかげで今日一日まるつきスケジュール  
がくるった。でもおかげで寿司が食べたしいや。美味しかったなあ。

昭和五十九年三月十三日、何故か日記はここで終わっていた。

## 一、終止符

中学卒業文集『道程』より

三年間を振り返って、永久保存となりそうな思い出をちよつと書きます。二つの事件について。

(その一)

あれは二年の文化祭の準備の時、思い出すなあ……。皆、頑張ったもんな。うちのクラスは訳ありてその時蛍光灯をはずして、ロッカーの上に置いといたんだよね。それを誰かがその上に、たいよう紙をのつけてさ、しばらくして誰かが、「井上、たいよう紙とって」

と言ったから、

「へいへい」

と取ったのだけど、その下に蛍光灯があるなんて知らなかったから……。たいよ

う紙と一緒に蛍光灯が落ちて、割れてしもたあ！そしてこの僕は破片と水銀をもちに頭からかぶっちゃった。おかげで蛍光灯恐怖症になっちゃった。蛍光灯が怖い。

(その二)

あれも二年の夏、うつ、思い出してしまった。あれは夏のポカポカ暖かい日の体育の時間、その日は水泳で僕はプールサイドで見学していた。

そのうち何故か僕は岡田君と吉岡君が、葉っぱを船にして競争しているのを見たのです。だんだん面白くなってきたもんで、僕はつい身をのり出したんですよ。事件はこの後起きた。バランスには自信のある僕です。そう、逆立ちは大の得意です。そ、それなのに……。

ああ情けなや……。もうわかったでしょう？そうプールに真っ逆さま、その瞬間、絶対忘れません。視界に広がる澄み切った青空、わたがしのような雲、自然は雄大だ……。そんなことを考えました？。

はっと思つて危機一髪、横にいた岡田君につかまりました。ほつとしました。神よ、ありがとう。しかし友情とは、儂いものです。岡田功、一見男らしく見えるがそれは間違いだつた。岡田はつかんできた僕の手を振り切つたのだ。

次に気が付いた時、目前に水面……。ドボン、ブクブク、あー沈んでいく……。その数秒の間は夢のようだつた。プールからはい上がると皆の目、ケラケラ、清田先生も笑つてた。ひどい恥をかいた。

給食の前に僕は清田先生の海水パンツと、トレーナーと体操着を着て家へ帰つた。

その他ほんと、三年間の中には色々な思い出がつまつた。修学旅行も最高だつたし、運動会、赤軍優勝！三の二は板垣先生を中心によいクラスだつた。それではこの辺で終わります。井上洋行は永遠に不滅です。奥田、吉岡、小田、久保田、正隆……。そして戦友（坂本）よ、皆々さようなら。ほたあるの光まあどーのゆうき……

板垣先生、京子さんを大切に……。ばいなら。END

### 三、修学旅行

中学修学旅行 作文集『72時間の夢』

待ちに待った修学旅行だった。やっぱり行ってきて本当に良かったものだ。僕の親戚は東京にもいて、僕自身行ったこともあるけど、なんせここ数年全く行ってないので、頭の中にはTVで見る東京しかなかった。

だから上野に着いて都内を回った時、じんわりと嬉しくなった。新宿副都心、東京タワー、サンシャインシティ……。その他なんだかんだ。

目に止まるものすべて良かったが、やはりサンシャインシティ60階からの景色は、むちゃくちゃすんばらしかった。米粒ぐらい(?)の自動車や、人々、小さな建物、広い視界……。良かった。今度は徒歩で都内をてくてく歩き回りたい。

それから富士山、これも又良かった。あの単純でも特徴ある形は、ちよいちよ

いと絵にすれば実物を見たことのある人も無い人も、すぐに「富士山」という名が出てくるんじゃないかな。

バスの中から初めて富士山が見えた時は、こんなにも美しくはつきり見えるなんてと、実物を見ている実感がわかなかった。なんて富士山は素晴らしいのだろう。

一合目、二合目と登って行くにつれ広がる視界、下に雲を見下ろした風景、吸い込まれそうな緑の木々や青い空、まだ残っている雪……。本当になんて富士山は素晴らしいのだろう。僕は初めて見る富士山や周辺の景色に、ボケーっと見とれてしまった。

他にもまだ旅館でのこと、富士急ハイランドでのこと、サファリーパークで見た動物たち、その他まだまだ沢山楽しいこと、思い出に残ることがあった。隠し持って行ったラジオで、あっちの放送を聞いたりしたっけな。

まっ、とにかくこの修学旅行、いつまでも忘れずにいたいものだ。

END

第三章 回想記



## 誕生

一九六七年（昭和四十二年）五月十三日、若葉のまぶしい五月晴れの日、小さな産声をあげて、あなたは予定より二日遅れはしたものの、元気な姿で私達を喜ばせた。体重は三千二百二十グラムでした。

あなたは父母、祖父母の祝福を受け、私達の計り知れない愛情の中で、我が家の長男として大切に育てられました。佐渡の美しい自然と、人情味豊かな島国で、素直で明るく、ひょうきんな子に育っていったのです。

昭和四十二年は、日本の人口が一億の大台を突破し、美濃部革新都政が誕生した年でもありました。又新潟県では、上越線複線化完成、県民会館開設の年でもありました。

翌年の昭和四十三年、あなたが一歳の時、作家の川端康成が、日本初のノーベ



ル文学賞を受賞、今も謎の三億円事件、メキシコ五輪とついでこの間のように思い出されます。

## 幼かりし頃

二、三歳頃、アパートの一室で、あなたがミニカーの底の小さな穴に、ドライバーを差し込み分解している姿を見て、びっくりした事がありました。

「この子は将来、工学部系の道を進むのだろうか」と思いながら、障子の穴からじっと見詰めていました。今にして思えば、この頃からすでに車を愛し、ラリーの道を夢見ていたのではないのでしょうか。

あなたは本当に車が好きでした。しかし小さい時は、ミニカーで満足していたあなたも、ラジコンで車を操り、次には十八歳で免許を取り、車を運転するまでになってしまいました。これが死への道につながるうとは……。

又こんな時もありました。カップえびせんに応募して三回もミニカーが当たった時、「洋行つて運がいいね」って二人で笑ったあの頃の事が思い出されます。

又、新潟遊園でのチューリップ祭の時、ウルトラマンの輪の中に入り、悪い怪獣をやつつける場面選ばれて、嬉しそうだったあなたの顔が目には浮かびます。

廊下の隅に置かれた、シールがいっぱいはってある整理箆笥にも、あなたの思い出がいっぱい詰まっています。

あなたが二歳の時、宇宙時代の幕明けの年として、人間宇宙船ソユーズ号のドッキングと飛行士の乗り換えに成功したのに続き、アメリカの宇宙船アポロ11号が、月面着陸に成功し、世界中の人々を驚かせました。

歌では、『黒ネコのタンゴ』が流行し、あなたもレコードに合わせて、よく歌っていたのに……。

## 初めての旅行

昭和四十五年の四月、あなたが満三歳の誕生日を迎える一カ月前に、九州のおじいちゃんの家へ出掛けた時、羽田空港では、重苦しい空気が漂っていました。ハイジャックされたよど号を目前に、私達は厳しい警戒の中を、YS-11機に乗り込みました。機内ではあなたは、スチュワートから戴いた飴を口にほおぼりながら、通路を行ったり来たりしていたあの姿が、今でも鮮やかに私の記憶に残っています。

日南海岸、洗濯岩、高崎山と楽しんだ私達は、ボーイング727で新大阪に着き、万博を楽しんで我が家に帰ってきました。その万博の太陽の塔の下で写したあなたと私の写真が、今はただ悲しい。その塔の下に、あなたは幸運にも二度立つことが出来ました。それは南高校が甲子園行きのキップを手にした時、応援者の一

人として甲子園に行き、友人と一緒に太陽の塔の下で撮った写真、それは十七歳の洋行でした。

## 妹と共に

昭和四十六年四月、あなたは海星幼稚園に入園、沢山の友達の中で、色々な経験をし、カトリック教の教えも少しずつ身に付け、明るく元気な子に成長してきました。

その年の十二月三十日には、あなたの妹が誕生、四つ違いの妹とは喧嘩することのなかった兄妹であったのに……。仲の良い兄妹であったからこそ、千鶴の粒の涙が痛々しい。

あなたと千鶴は、顔も似てなく、性格も違っていました。あなたは私に、千鶴はお父さんに似ていました。あなたは、持ち前の明るさで我が家に笑いを運んで

来てくれていたのに。

## 転勤

昭和四十八年三月、私達は転勤の為、私の故郷佐渡を後にし、西蒲原郡黒崎町大野に借家住まいをすることになりました。千鶴一歳、洋行五歳の時でした。

知らない土地での不安な生活の中で、隣人の温かい心に支えられ、その年の五月からあなたは有明幼稚園に通園する事になりました。

そうそう、この有明幼稚園の通園は、あなたの好きな幼稚園送迎用のバスで、片道三十分位、揺られて往復しなければなりませんでした。車が大好きなあなたにとって、毎日の通園は楽しかったようですね。

昭和四十七年は、田中角栄が庶民宰相の椅子に座り、一方、グアム島のジャングルに二十八年間隠れていた横井庄一軍曹が発見された年であり、翌年にはオイ

ルショックとなり物不足という状況がクローズアップされた年でもありました。

## 大野小学校での二年間

昭和四十九年四月、あなたは大野小学校に入学。その時の一年、二年の担任が樋口先生でした。ピカピカのランドセルに、淡いグレーのスーツそして赤い蝶ネクタイ、十五年前の入学式の写真。こんなにも幸せな時があったのに。

持ち前の明るさで友達も多く、毎日の様に友達が遊びに来てくれあなたはざりがに取りや、缶蹴り遊び、キャッチボールと外で元気に走り回っていました。特に大久保君とは大の仲良しで、あなたが転校して再び、南高校で彼と再会したのも何かの縁だったのでしょう。その彼がお線香をあげに来てくれた時、あなたの幼かりし頃が思い出されて苦しくなりました。

又、自由研究であなたは“カップラーメンの空き箱利用”を発表し、秋のジュ

ニア展では、版画で入選しました。風雨の激しい中を、家族四人で展示場へ見に出掛けた時の事が、今もはっきり記憶の中にあります。

もう一度あの頃のように、家族四人になれたならば、どんなに幸せでしょうか。昭和四十九年と言えば、長嶋選手現役引退、ルバング島から救出された小野田元陸軍少尉、昭和五十年に、エリザベス女王来日、沖縄海洋博覧会、その時あなたは、まだあどけない八歳であったのか。つい昨日のように思えるのに……。

### 曾野木小学校時代

昭和五十一年三月、曾野木小学校に転校したのは、あなたが小学三年の時でした。

人懐っこいあなたは、この学校にもすぐ馴れて、家の前の原っぱで、黄色い声を張り上げて野球を楽しんでいましたね。窓越しに目を細めて眺めていたあの頃

の私に比べ、今の私は何よりも大切な我が子を失い、極限の悲しみのもと真ん中に立たされています。

世はまさに無常です。しかし、この原っぱだけは、あの頃と同じく子供達の遊び場になっています。

私が、この曾野木に永住を決めた第一条件は、何よりも学校に近く交通事故の心配が無いという事でした。

三年の秋、あなたは中学校の給食室の絵を繊細なタッチで上手にまとめ上げ、ジュニア展に、「入選すると思ったのに、佳作で残念ね」と言われた程、上手に書いてあった。佳作であったからこそ、あなたの作品は戻ってきてくれたのでした。

気に入っていたこの絵を、私は早速額に入れ玄関に飾りました。絵のお好きな方が、誉めてくれると、ついその気になって目尻が下がる思いでした。あなたの残したこの絵は、玄関の壁に掛けられて、訪問者の心を和ませてくれる事でしょう。



絵の中に描かれている三羽の鳥は、あの告別式の時、大空高く舞い上がった数羽の白いハトのうちの、三羽であったのでしょうか。

昭和五十一年は、ロッキード事件で明け暮れた年であり、モントリオール五輪、五つ子の誕生、スクスク成長した五つ子ちゃんも、もう中学生、時の経つのは早いものであり命の強さに感動し、又反面、命の脆さに涙がこぼれました。五十二年は、王選手が七五六号で世界のホームラン王になり、王ファイバーに酔いしれた年でもありました。新潟 佐渡間にジェットフォイルが就航し、その年のあなたの自由研究は、「ジェットフォイルについて」でした。自ら乗船したり、資料集めに走り回ったりしていたのに。

五年の後期、あなたは副会長として、少年自然の家では入館の挨拶、翌年の入学式には、生徒会代表の挨拶と頑張っていました。まだあの頃、私の背丈を追い越してなかったあなたは、

「お母さん、挨拶の練習するから聞いてて、間違えたら言っつてね」

と何度も声を出して練習していた、あの真剣な顔が忘れられません。

又六年の三学期に、あなたは学校の階段の手摺りを、ハードルのつもりで飛びこそうとして失敗。救急車で運ばれる中「頭を打ってなければよいが」と私は神に祈っていました。精密検査の結果、右手首骨折以外異常なく、ホツとしたものでした。

右手のギブスが痛々しかったが、左利きであったことが不幸中の幸いでした。手にむくみがきて痛がっていたことや、手にビニール袋を被せてお風呂に入り、背中を流してあげたこと、長い間、病院通いをしたあの頃、思い出せば色々ありました。

卒業式の前日にギブスが外れ、金ボタンの学生服に身を包んだあなたは、晴れて卒業証書を手にした。嬉し涙の中で私はあなたの未来に幸多かれと祈った筈なのに……。卒業祝いのラジカセが、今はあなたの仏前で私の涙を誘うばかりです。

昭和五十四年は、国公立大学で初の共通一次入試を実施した年です。あなたは

八回目の昭和六十一年にこの入試に挑戦、それからの月日は、水に浮かんだ花びらの如く儂く消え去ってしまいました。

## 中学生時代

中学生になり、心身共に成長し、何時の間にか私の背丈を追い越してしまった。危険から守ってあげるには、あまりにも大きくなりすぎて、あなたは私の手から少しずつ羽ばたいていったのでした。

中学一年の時、卓球部員として部活動に励み、個人戦でベスト8入り。そして二年、先輩引退後は部長になれると喜んでいたのに、尿検査で潜血がみられ、精密検査の為、夏休みを利用して吉田病院に一週間入院。

健康であったあなたが、初めての検査入院、私も泊まり込みの一週間でした。窓からは自然がまだたつぷり残っている吉田の風景が眺められ、時折り遠方に見

え隠れして、越後線の電車が走っているのが見えました。

入院生活の中で、好き嫌いの多かったあなたは、一週間の病院食には大分まいったようでした。病院前に、こぢんまりしたコシヒカリのおにぎり屋さんがあり、タラコ、鮭のおにぎりを買いに走ったものです。あなたと二人で赤いサルビアの咲いていた中庭を眺めながら、仲良く病院食や、おにぎりを分けあって食べたあの日が懐かしい。退院の日、まぶしい太陽の下で何と空気が美味しく感じられたことでしょう。

その後、体育はストップされ、卓球への未練と戦いながらも、あなたはその後、副会長として生徒会活動に力を注いだようです。生徒会新聞“信濃川”に、後期の抱負、三年生への激励の言葉が掲載されていた半ば黄味がかった新聞が見つかりました。これも又、あなたの思いでの一つとして大切に取って置くことにします。

## ゴルフのクラブで

小学生の頃、寝付きの悪いあなたは、よく、布団の中で、

「眠れない眠れない」と言って私を困らせたものでした。

「寝よう、寝ようと思うから眠れないのよ。無理に寝ようと思わないでいたら」

「そんな簡単なことお母さんいつて……」

「羊の数、数えたら」

「羊が一匹、二匹、三匹……」

ところが中学に入学した頃から、眠くて眠くて、眠り病にかかった様に変わってきました。日記に書かれていたように、毎日睡魔との戦いでした。

私にとっては、朝あなたを起こすのが一仕事であり、そう簡単には起きてくれませんでした。階段を何度もかけ上り、かけ降り、そこでひらめいたのがゴルフ

のクラブでした。あなたの部屋は、居間の丁度真上にあつたので、二度起こしても起きない時は、下からゴルフのクラブでつつく事にしました。あなたも足で“ドンドン”と起きたサインを送ってきましたね。

## 南高校へ

受験の年、あなたは迷わず南高校に決めていた。小さい時から何故かこの高校で、卓球をすることが夢だったようですね。

受験発表の日は、三月というのに雪のちらつく寒い日でした。白いコートを着て出かけたあなたの後姿を見送り、私は電話のそばにくぎづけになっていました。そして、合格の嬉しい知らせ、あの時の感動は今だに忘れることが出来ません。夕方のテレビに偶然に友人と喜びあっているあなたの姿が写り、再度合格の喜びを分ち合ったのが、ついこの間のように思えます。この時の入学祝いがシンセサ

イザーでした。

あなたはその頃、イエローマジックオーケストラが大好きで、細野晴臣、坂本龍一、高橋幸宏に熱中していました。音楽は苦手だと思っていたあなたが、シンセサイザーに首ったけになり、色々な本を買い集め、上手に弾いていた姿が目につかび胸が詰まります。そのシンセサイザーも主人を失い、淋しそうに仏前でああなたの遺影に涙を流しているように思えます。

あの頃、あなたはアマチュアバンドを作りたいと言っていました。自動車部に入らず、こちらの道を進んでいてくれたら……。

## 高校時代

昭和五十六年は夢の宇宙船、スペースシャトル打ち上げに成功、そして、五十七年は待望の上越新幹線開通、翌年東京ディズニーランド開園、又全国のお茶の

間に「おしん」旋風が起こった年でした。その時あなたは高校一年生でした。

高校二年は、あなたの短い人生に於いて素晴らしく有意義な年でした。水芭蕉の美しい尾瀬のハイキング中に、南高校は新潟県代表の甲子園行きのキップを手にし興奮の渦に沸いた。あなたは勿論、応援者の一人として甲子園行きのバスに乗り込んだのでした。

炎天下での声援に、京都西高校、明德義塾戦と勝ち進み、遂にベスト8、県勢として五十八年ぶりの快挙であり、新潟県人を沸き上がらせたものです。あの時の感動は、あなたの胸中に青書の一ページとして深く刻み込まれたことでしょう。

この年の秋、あなたは教育番組の『You』に出演。タイトルは「通学路の秘かな楽しみ」でした。数々の思い出を短かった二十一年間の人生に縮図の如くまとめあげ、その思い出を私達家族に残していつてくれたとは……。

又この頃、あなたは素晴らしい友人を私に紹介してくれました、上越教育大を目差していたまじめで学生らしい知的な人でした。学習面や、家庭の事、或は私的



な悩みなど相談しあう良き友人であり、二人の目標は、国立大学でした。

あなたが高校三年で千鶴が中学二年の三学期頃、千鶴が体調を崩し、病院通いが始まった。私の全神経が千鶴の体に注がれて、あなたの大学受験はあなたに任せられていました。

昭和六十一年度は、私立の東海大と国立の長岡技科大の二校を受験し、東海大は夜遅く発表されたテレビで合格を知り、家族四人で喜び合いました。

上越教育大の発表の時は友人と二人で見に出かけたが、残念ながら桜の花を咲かせることが出来ませんでした。数日後の長岡技科大の発表の日、ガンセンターで点滴を受けていた千鶴のそばで、私は落ち着かない気持ちであなたのことを安じていました。しかし、友人の時と同じ様に、あなたは自分の名前を見つけることが出来ませんでした。そんな時、あなたには心を癒してくれる友人がいたから私は安心していました。

二人は、お互いに励まし合い、一浪しても希望校にと強い信念で予備校に進路

を決定しました。今思えば、私達家族とあなたが、一年間でも多く一緒に暮らせる為の予備校時代ではなかったのでしょうか。

昭和五十九年は、かい人21面相による“グリコ及び森永事件”ロス五輪開催そして、エリマキトカゲ等“動物タレント”が大活躍した年でもあった。新潟駅南にプラーカ新潟が誕生し、新潟庁舎が落成したのはあなたが高校三年の昭和六十年でした。

## 学生服

私が一番好きだった思い出の中のあなたは、学生服を身に着け、黄色い自転車で通学していた時の姿でした。

髪を軽くドライヤーで形をつけ、何処となく愁いを含んだあの顔は、年頃の青年の私の大好きな顔でした。底抜けに明るいあの笑顔の中に、ちよつと見え隠れ

するあの甘酸っぱい目が魅力的でした。

初めて学生服を着た小学校の卒業式では、まるで服が歩いている様に見えるのに、何時の間にか学生服を粹に着こなせる様になっていました。色白の肌に黒の詰め襟が似合ったのかも知れません。

又シャンプー後は、私の化粧箱の鏡の前で、ドライヤーを上手に使って髪型を整えていたあの時の姿が目には浮かびます。

そうそう、こんな事もあった。時々私は、あなたの注文に応じて前髪と耳元の髪を耳につかえない程度に切ってあげたことがあります。首にタオルを巻き、その上から風呂敷を肩にかけて、母さん床屋の始まりでした。

そんな思い出も、つい昨日のように思えます、遺影の前に私の好きな数枚の写真を飾りました。その中の一枚は、いうまでもなく、ちょっとすました学生服姿のあなたであった。

## 物真似

小さい頃から、物真似を得意としたあなたは、南高校時代、帰宅するとよく国語の先生の物真似を得意そうにしてみせてくれたことがありました。

そういえば、本を読めば知らずに主人公に成り済まし、幻想的な気分になっていた様に、物真似をすればすでに自分が国語の先生に成りきっていたのでしよう。一見、恥ずかしがりやのはにかみやに見えるあなたの、面白い一面でもありました。

また、「夜のヒットスタジオ」の吉村真理の物真似も得意として「どうも、吉村真理です」で私達を笑わせたり、関根勤の「僕、三つつなの」等は最も得意としたものでした。デーモンの「アハハハ、デーモンだあ」も今は懐かしく思い出されます。逆縁の悲しみから半年経った今でさえ、今だに洋行の死が信じられないのは、

こんなにも鮮やかに私達の心の中に生き続けているからでしょう。又何時か、ひよっこり帰ってきてこんどはだれの物真似を演じてくれるのかしら……。

薄ピンクのこぶしの花が咲く頃か、あの純白の利休梅が我が家の庭を彩る頃か、それとも記念樹の桜の花が咲く頃に帰って来てくれるのであろうか。

## 或るアイデア

或る朝、私は主人の背広の裾に一枚の紙切れが洗濯バサミで留められていたのを見つけました。

「何だろう?」

「あら、すごいアイデアなこと。さすが洋行だわ、ふふふ……」

一枚の紙切れにイラスト付きで、こんなふうに書かれていた。

請求書

我が家の大蔵大臣である父上殿

参考書代 円

文庫本代 円

靴代 ×××円

以上お願いします

金欠病の洋行より

このアイデアには私もさすが「やったね」と感心したものでした。男の子のユニークな発想は、女である娘からは得られなかったものであり、今迄、幾度かそういう男の子独特の発想に驚いてきました。これに成功したあなたは、時々この手を使うようになっていました。それからというもの、朝起きるとつい背広に目がいく私でした。

背広に留められた一枚の紙切れ、そこに書かれた楽しい文とイラストが朝の眠気を覚ましてくれました。そういえばあなたは、小さい時から、奇想天外なやり

方で、私達を何度か楽しませてくれたものでしたね。

## 予備校時代

桜の蕾もふくらみかけた昭和六十一年四月、予備校生としての新しい生活がスタートしました。学生服に“さよなら”をしたせいか、ちよつと大人っぽく見えてきたあなたに、健康に注意し、自分の目標に向かって一日一日を大切に過ごして欲しいと願っていました。新緑のまぶしい五月、予備校生も板に付き、五月晴れの空のようにあなたの目が輝いていたのを覚えています。この爽やかな五月十三日はあなたの十九歳の誕生日でした。

この年の四月十六日、運転免許取得。普通の人より早く免許が取れて、運転に対する自分の腕を過信すぎていたことが、今回の事故の要因の一つにつながったのではないだろうか。運転免許証、これは、大変便利なものであるが、一つ間

違えば一瞬にして人の尊い命を奪ってしまう、恐ろしい武器に変身します。

又、予備校時代の最大の思い出は、八月の長岡祭に友人と一緒に富田勲の“音と光りのファンタジー”を見に行き、すごく感動して帰ってきたことです。うんわるくあの日は雨が降っていたものの、どんなに素晴らしい演奏だったのか、雨に濡れた洋服を着替えようとせず、その素晴らしさを私に立て続けに話してくれました。シンセサイザーに熱中していたあなたにとって、この花火とシンセサイザーの競演は、又とないチャンスであり、あなたの心を完全に魅了してしまった。この興奮は、しばらく続きました、勉強の合間にあなたの部屋から聞こえていた、あのシンセサイザーの美しい音色が、今でも私の耳から離れません。

予備校生活も半ばを過ぎ、受験生の二人の親となった私は、あなたの受験には何一つ心配はなかったが、千鶴の体調の悪さに受験戦争の親の苦しみを初めて嫌という程知らされ、私の目は完全に千鶴に注がれていました。

勉強をして、食べて寝ての繰り返しのない予備校時代に、あ



あなたの体重は五キロも増え、細身の体に貫禄がついてきました。

受験も間近かになった頃、あなたは突然、国立大ではなく私立大へ行きたいと、私にこつそり話したことがありました。しかし予備校で国立の理系クラスにいたあなたは、予定通り国立と私立の両方を受験することにしたのでした。

長いようで短かった一年間、アツと思う間に受験シーズンになっていました。私立の受験では、東京の義理の姉宅や、神奈川の私の実弟宅でお世話になり、その時ごちそうになった蓼大福が、どんなにお美味しかったのか、私達に笑顔で話してくれたあの時の姿が、目に浮かんできます。

自分の納得のいく点数を取った共通一次、そして二次試験の長岡技科大の二日間の試験も終わり、あなたの長かった受験戦争は終わりました。手足を延ばして、思い切り好きだけ眠ることも出来、好きだけシンセサイザーに首っただけになることも出来ました。

## 迷いの中での決意

私立の発表が始まり、四通の合格通知を手にしたあなたは、国立の発表を前にして、私立大の入学手続きに一人で上京し、鯨荘という一風変わった名前のアパートまで契約して、昭和六十二年三月十四日帰宅。丁度その日は、長岡技科大の合格発表の日であり、千鶴の卒業式の日でもありました。

家に居た主人が、お昼のニュースで張り出された合格者名に、あなたの名前を見つけ一人で喜んでいました。玄関迄、私と千鶴を迎えに出た主人の顔面が、その喜びを物語っていた。新潟駅迄、あなたを迎えに出かけた私達は、「洋行、技科大合格おめでとう」でもその時あなたが複雑な顔をしていたのを覚えています。一浪迄して目指した長岡技科大に合格した事は、確かに嬉しい筈である。それなのに、はしゃいで喜んでいるのは、むしろ親の方ではなかったのか。

その日の夕刊に、長岡技科大、そしてその下に上越教育大の合格者名が載っていました。去年は二人して仲良く不合格だったあなたと友人が一浪迄して得た勝利の栄冠、こんな嬉しい事はなかった筈だったのに……。

そして、私立大に心変わりしたあなたと、国立大を勧める主人との、背中合わせの毎日が続いたのでした。

確かに、誰が考えても、長岡技科大を捨てる事は勿体無い話である。主人だけでなく、誰もがあなたに国立大を勧めました。しかし、私立大の手続きを終え、アパート迄決めてきたあなたも、自分の意志を主張し、一步も譲ろうとはしませんでした。ただ、私と祖母だけが、あなたに、自分の進路は自分で決めて、悔いの残らぬようにと助言したのでした。正直言つて、私の心中は、二つの大学とも強い未練がありました。私立大は、私の弟の母校であり、又あなたが去年に引き続き今年も合格した大学である。そして又、長岡技科大は一浪迄して得た合格のキップである。

悩み続けたあなたは、結局、国立大に決め、主人を安心させました。しかしあなたの心の中がどんなに複雑であったか、私には理解出来ませんでした。

## 記念樹

昭和六十二年三月、合格報告に予備校に出かけたあなたは、一本の桜の木を持って意気揚揚と帰ってきた。細くて小さな木には、葉や花になる小さな芽がたくさんついていました。

「これ合格祝いだって、まだいっぱいあったよ」

「あら、桜の木じゃない、予備校もなかなかやるわね。グッドアイデアだわ」

「今年、花が咲くかなあ……」

「花の芽らしいのが三個あるから、三輪の花が咲くんじゃない」

この桜の木は庭の片隅のグミの木の横に祖母が植えてくれました。その年の四

月の下旬頃、思った通り薄ピンクの桜の花が三輪、あなたの合格を祝ってくれるように咲いてくれました。何時だったかあなたが帰ってきた時、満足そうにその桜の花を見ていた姿が思い出されます。

次の年（洋行が亡くなった年）も数輪の花を咲かせてくれた桜の木が、今は悲しい思い出の記念樹となってしまう。あなたが私達に残していつてくれた桜の木は、毎年、同じ頃、美しい花を咲かせてくれるであろう。その度に、十九の春に酔いしれていたあの頃のあなたの笑顔が、私の脳裏に浮かぶことでしょう。平成元年二月七日、片隅に植えられていた桜の木は庭師の西脇さんの手によって陽当たりのいい一等地に植え替えられました。この木は私達の家族にとって、どんな物にもかえられないあなたの形見の宝石でした。

三月十六日、胸の詰まる様な技大合格発表の日、私は、まだ小さな芽を出したばかりの桜の木を眺めながら、二年前を思い出していました。

## 技科大一年生

昭和六十二年四月、入学式を目前に控えたあなたは、晴れの日の為に、背広、ワイシャツ、ネクタイを新調、又アパート生活での日用品の準備に追われていました。親許から離れ、生まれて初めて経験するアパート生活に、数え切れない夢を抱いていたことでしょう。

入学式の日、運悪くあなたと千鶴の入学式が重なってしまい、私は後髪を引かれる思いで千鶴の方に出席しました。

「技科大の卒業式の時は、絶対に私が出席するからね」ってあんなに約束したのに……。

あなたの新しい生活がスタートした時、私と千鶴は何か気が抜けた様に淋しかった。いつも三人一緒に食べていた夕食、いつもの席にあなたが居ない。それに

慣れる迄には、時間がかかったけれど、休みになるとあなたは元気に帰って着てくれました。高速を使えば一時間ちよつとの距離ですもの。

あなたが帰って来てくれた日は、あなたの好物が食卓を飾り、夜遅く迄、あなたを中心に家族四人の笑いが尽きなかった。あの幸せな一時を、私は今迄当然のように思っていました。

日曜の夜、サラダやおから、ひじきの煮物等タツパに入れてもたせ、玄関の外迄私達はあなたを見送りました。シートベルトを着けたあなたに、

「気を付けて運転してね」

「うん、わかったよ」

白い車の中のアあなたは、私達にVサインを残して長岡に向けてスーッと走り去った。あなたがアパートに着く迄、私はいつも事故に合わなければよいがと、時計を見ながら心配していました。

昭和六十二年四月、あなたは自動車部に入部、これがあなたの運命を確実に死

に一步一步近づけた事になる。大学に入学すると同時に、あなたは中古の赤いミアミリアを買って貰い、若葉マークも取れ、運転に対する注意力が薄れ、一番危険な時でもありました。何度も気を付けるように注意すると、

「お母さんは心配性だなあ、大丈夫だって」と言うのがあなたの口癖でした。自動車部に入部してからは、私の心配が綿菓子のように膨れあがったのでした。

今考えてみると、一つハンドル操作を誤れば死に連がる危険な悪路走行練習に、私は何故早く気が付かなかつたのだろうか。ラリー練習の危険性をあなたに助言してあげてたらと、自責の思いに悩み続けました。

あなたは、自動車部員の一人として、去年そして今年に続き、連続優勝への夢に青春を賭けたにちがいない。二十一歳という若さがそうさせたのかも知れませんが、

この年の八月、長岡祭りの時、私達三人は生まれて初めて見る三尺花火に胸を膨らませ、高速道路をあなたのアパートへと急いだあの日の事が、つい昨日の様



に思い出されず。五階の屋上は、夏だというのに涼しくて心地良かった。私達三人はシートに座り、あなたは折り畳みの椅子に座って、お菓子を掴みながら缶ジュースを飲んでいましたね。

私達の他に沢山の人が、それぞれの輪の中で思い思いに、大空に咲く小さな花、そして大輪の花に歓声をあげ、拍手していました。ちよつとよそ見していると、パツと消えてしまう一瞬の華麗さ、だからこそ人は夏の夜の花火に酔いしれるのでしょうか。家族四人で見る三尺花火、あんなに楽しかった思い出を残して、何処を捜してもあなたの姿はもう見られない。命というものは、あの花火の様にパツと消えてしまう儂いものなのでしょうか。

十一月には、新築したばかりのコーポアルファに移り、やっと素敵なあなたのお城が出来て喜んでいた。八畳一間にちよつと大き目のキッチン、バス、トイレ付き、この部屋にあなたの青春を想像していた私だったのに……。このアパートへは千鶴と一緒に二、三度行ったことがありました。

あなたのアルバムの中の数枚の部屋の写真、その中の一枚は、美味しそうなカレーライスが写った写真であった。多分、自分ながら上手に出来た嬉しさのあらわれでしょう。十月月という短い間とはいえ、この部屋で楽しい学生生活を送っていたにちがいません。

## 技科大二年生

昭和六十三年二月、旧ラリー車の白のカローラセダンを購入。先輩と静岡迄、車を取りに出かけた時の写真には、あなたが嬉しそうに写っていました。何時の日だったか私に、

「赤いファミリアの車を売って、ラリー用の車を買うことにしたんだ」と嬉しそうに話した言葉を思い出します。この車は、先輩二人の車と同種のもので、三台の車の写った写真の裏に、「これはすごい！三兄弟」と書いてありました。この

車であなたは、本格的なラリーの練習を始めたのでした。

この年の八月二日、四日迄、第二十七回関東甲信越学生自動車連盟競技大会が宇都宮市周辺、丸和オートランド、日光スピードパークで開催されました。あなたの出場を知った私は、四日の日が終わる迄、事故が起きねばよいかと、落ち着かぬ日を過ごし、競技会を終えて帰って来た時、やっと安堵の胸をなでおろしたのでした。

二年連続総合優勝に輝いた長岡技科大、自動車部員の喜びは、レーシングピープル十月号に掲載されていた。この競技会で、あなたは自分の腕に多少なりとも自信をもったに違いありません。来年も是非優勝したい、その気持ちが安全第一主義を忘れて、競技至上主義、競技成績第一主義に走ってしまったのでした。

競技会を終えて数日後、あなたはお盆の手伝いに佐渡に出かけました。目が回る忙しさの中で、袖を捲り上げ、短パンをはいて汗を拭き拭き、花の配達に走り回っていたあなたの姿が目に見え、胸が詰まる思いです。

八月十七日、私達は三人で午前二時過ぎ出航の臨時便で、新潟に向かっていた。思い切り働いてきた疲れた体に、夜中の海上からの風が清々しかった。特に日本海の船上での夜明けは絵になるほど美しい。その白々と明けていく夜明けを、あなたは甲板でどのような思いで眺めていたのでしょうか。

何処迄も果てしなく続く海原、吸い込まれそうな海、雄大な日本海に囲まれたあなたの生まれ故郷佐渡、幻想的な美しさの中で、これが最後の佐渡であると思ってもみなかったでしょう。

## 忘れられない言葉

事故の数カ月前、洋行が休みで帰ってきた時、車の助手席で、

「ねえ、洋行、自動車部って危ないからやめたら……」と何に気なく言った私に、  
「俺から自動車部を取ったら何も残らん」とはつきり言い切った。

「そしたら大学やめて、自動車学校へ行ったら」

「……」

「それは冗談だけど、大学の方も頑張ってるね。気を付けて運転しないと駄目だよ」  
「分かってるよ、心配性だなあ」

あの時のあなたと私の会話が、つい昨日のように感じられます。

真剣な顔で、はっきりと言い切ったあの言葉にたいして、私は何も言う言葉が無かった。それ程好きな自動車部であったのか……。車が好きで自動車部をやめられなかっただけではない、多分それには、先輩達の強い友情の絆があったからでしょう。自動車部での先輩達との交流が、あなたにとっては一番楽しかったのではなからうか。自動車部員であることに強い誇りを持っていたのでしよう。

「俺から自動車部をとったら、何も残らん」あの言葉が、いつまでも私の頭から離れない。甘酸っぱい笑みを浮かべている遺影の中のお前に、そんな芯しんの強さが隠されていたのでしょうか。

## 最後の夕食

私達が、あなたと会った最後の日は、無線の試験を受ける為に突然帰ってきた、夏休みも終わりに近づいた八月二十七日でした。

「明日、無線の試験なんだ」

「あら、千鶴も試験だから一緒だね」

「へえ……千鶴も試験か」

「よし、じゃ洋行の好きなハンバーグと野菜をたっぷり食べさせようかな」

私が夕食の準備を始めた頃、クーラーのきいた客間では、二人とも試験勉強をしていました。やはりあなたが帰ってくると、家の中が明るく賑やかになり、夕食も又一層、美味しかった。しかし、これがあなたとの最後の夕食となってしまうのです。あの時、満足そうに食べていたあなたの姿が思い出される。貝のお

味噌汁を、おかわりしてくれたのに……。

襖に寄りかかり、小さな無線の本を一所懸命見ていたあなた、傍らでは千鶴がテーブルに向かって勉強していました。高校の時から無線の試験を受けよう受けようと思いつながら、機会を逃がしていただけに、張り切っていたのですね。

「合格通知は何時くるの？」

「九月の初めの頃かなあ」

「そう、頑張りな」

「うん、無線を持っていると自動車部に役立つんだ」

二十八日は、試験が終わるとすぐ長岡へ帰ってしまった。やはり友人といえるのが一番楽しかったからでしょう。八月二十八日が、あなたと私達の最後の日となつてしまった……。あんなに元気だったのに。人の命は分からないものです。

九月上旬に届いた無線合格通知を手に、飛び上がって喜んでいるあなたの姿が目に見えぬ。大学祭が終わってから、その葉書を持って帰ってくるつもりであつ

たのでしよう。それなのに数日早く無言の帰宅をしてしまったとは……。祭壇の前に置かれた無線合格通知が今はたださみしい。

## 最後の電話

私があなただの声を聞いた最後の電話は、事故の三日前の九月十一日、日曜日でした。

「もしもし、あら、洋行寝てたの」

「うん……」

「お金、大丈夫？ やっていける？」

「うん、大丈夫だ」

「ねえ、洋行の部屋、千鶴と代わってくれない？」

「ああ、いいよ」



「じゃあ、何時帰ってくれるかなあ、荷物持ってもらいたいし」

「うん、今、学園祭前で忙しいから、終わってから帰るよ」

「そう、じゃあ待ってるわね」

学園祭は九月十七、十八日、それが終わってから帰ってくる筈であったのに、運命のいたずらとは、こういうことをいうのでしょうか。

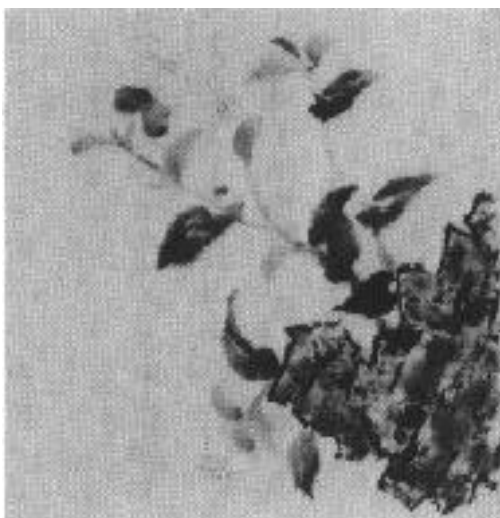
千鶴の部屋が狭かったので、あなたの部屋と代わってもらおうと思って電話をかけたのが、あなたの声を聞いた最後となるうとは……。あの時のあなたの声ははつきりと脳裏に焼き付いて離れない。ちよっと眠そうなああの声が忘れられません。

「私、狭くてもこの部屋でいいから、お兄ちゃんの部屋はこのままにしておこうよ」

私も千鶴と同じ気持ちであった。部屋を取り替える気持ちはなくなっていました。あなたの部屋は、あなたの思い出として大切にとっておきたい。何時か「ただ

いま「と」言っで帰ってくねる田舎……。

第四章 温かな手紙



## 一、悲しみを強さや深さにして

今から二十六年前の大妻女子大の学友から励ましのお手紙を戴いた。お互いの安否を気遣いあいながらも、卒業以来一度もお会いする事なく今日に至っていた。私が丁度、洋行より二歳若い頃の懐かしい学生時代の親友の一人である平野順子さんは、この様に書いて下さった。

「拝啓

御長男様の御死去の報、ただ胸が、ふさがるばかりで、茫然としてしまいました。

事故の九月十四日以来、御心境の程、いかばかりかと……。

“洋行君、どうか天国から、常にお母様やお父様を見守ってあげて下さい  
呉々もよろしくね”

アヤ子様、いつも貴女の心の中には、洋行君がいらして、勇気を授けて下さると思います。二十年有余、宝物のように育て、立派な大学生になられ、御両親様の誇りで有りました洋行君、天国から、常に光をそそいで下さると思います。お母様どうか頑張ってくださいませ。

時間や、月日がかかることですが、この悲しみを強さや、深さにして、私達に人生のことについて、教えて下さいませ……」

彼女の言われる様に、洋行の死の悲しみを強さや、深さにして、私自信、生と死を真剣に見つめ、逆縁の悲しみからの立ち直りを、自分で見つけ出し、強く、深く生きねばならぬと思うのである。

さらに続けて

「秋も深まり、人生のことを色々考えさせられる今日、この頃、逆縁の悲しみに浸っておりますアヤ子様の事を思い涙しております。何のお力にもなれず、申し訳なく思っております。」

御主人様にも呉々も、お体を大切にと申し上げて下さいませ。佐渡にいらっしゃる御両親様もお元気ですか。

色々、書きたいこともありますが、今日はあまりペンが進みません、又の折りに……。

かしこ

彼女のお手紙を何度も読み返しているうちに、この文面の一つ一つの言葉が、どんなに私の心を救ってくれたことが、

## 一、運命に負ける事なく

埼玉県に住んでいらつしゃる、同じく大学時代の学友の一人である中村幸子さんからは、毎年、毛筆で素晴らしい年賀状が届き、あまりの達筆に見とれていたものである。

その幸子さんは

「その後、お元気でいらつしやいますか。お便り頂きながら御返事も差し上げず本当に失礼致しておりました。

あまりのショックに心が重く、ペンが動かさずに今日に致つてしまいました。許して下さい。

息子さん、車の事故で若い命を断たれ、どんなに無念のことか。又御家族の皆様、殊にお母さんのお心はと思うと心が傷んでたまらない気持ちです。

人生何が起こるかわかりませんね。“運命”という言葉が頭の中をかけめぐります。どんなお慰めの言葉も、貴女をすぐ元通りにできるとは思えません。時間がだけが、ほんの少しずつ、悲しみをやわらげてくれるのでは……と存じます。どうか頑張つて下さいませ。……」

「……世の中色々な事で苦しい、悲しい思いをしておられる方々、数え切れない程います。どうか貴女もこの運命に負けず、楽しい日々を取り戻されま

す様、心からお祈り申し上げます。

私は、今のところ家族に心配事、大きなものはありませんが、十年寝たり、起きたりで、最近ほ、寝たり、寝たりになってきた姑のことで悪戦苦闘しています。

それではお体お大切に、又お便りします。

かしこ」

彼女も又、卒業以来、一度もお会いする事なく、月日だけが過ぎ去っていた。二十数年お会いしなくても、このお手紙は、万事行き届いた私への励ましのお心遣いで埋まっていた。

文面の通り、この世には私以上に苦しく、悲しい思いをしておられる方々が数え切れない程いる。この苦しみに打ち勝たねば、とても生きていけないし、悲しい運命に負けていられないのである。一日でも早く立ち直らねば……。しかし言葉では分かっただけでもやはり、心の痛手は簡単にきえるものではなかった。



### 三、涙が枯れ果てる迄

八王子に住んでいらっしやる私の高校時代の親友、安藤喜代子さんは、東京の小さなアパートで、たった一人の学生生活を送っていた時、心の支えとなってくれた友である。

彼女の手紙も又、どんなに私の傷ついた心にそつと優しい手を差し述べてくれたことか。

「突然の事で、本当にびつくりしました。楽しい学園生活を送っておられるとばかり思っておりましてのに。まさか洋行君が亡くなるとは……。

何とってお慰めしたらよいのか言葉もございません。だいぶ前になりませんが、帰省した時、榎さんの実家におじゃまして、雅彦が洋行君に遊んでもらった時の事が、すぐに頭に浮かんでまいりました。

人は、いつかは必ず死を迎えます。親が先に亡くなるのは自然ですが、その時の悲しみと淋しさは大変なものだと思います、まして親より先に子が死を迎えるという事は、当の親でない限り、私には想像しがたい程の悲しみ、苦しみでしょうね。

貴女の気持ちを考えると、本当に涙が出てまいります。もう涙も枯れ果てた頃かもしれないませんが、とにかく今は、涙が一滴も出なくなる迄、泣いて泣いて泣きあかして下さい。

そして、洋行君はいつまでも貴女方の心の中に生きているのだと思って、気持ちを切り替える様に心がけて欲しいと思います。それには相当の月日が必要でしょうが、母親である貴女が一番しっかりしなければならぬと思います。

実は、葉書を頂いた時に、電話をしようと思ったのですがどのような言葉をかけてあげたらよいのか分からなくて、手紙にしました。貴女方の悲しみ

が、ひしひしと伝わってきたのです。

私が、こんな事を書いて、人の事だと思って”とお感じになるかも知れませんが、洋行君の為にも、御主人、妹さんの為にも、一日も早く元気になられますように。

洋行君、安らかにお眠り下さい。

かしこ」

喜代子さん、貴女の言われる通り、洋行に私の心の中で生別より以上に、鮮やかに生き続け、一日中洋行の思い出が、私の頭の中に、ぎっしりと網の目の様に張り付いて離れません。

あまりの苦しさに、貴女の言われた様に、瞼が重くなる程、泣き明かした時も度々あった。

楽しい時には笑い、悲しい時には思い切り泣き明かす事も必要なのですね。

#### 四、花に託して

青森県の村上新町病院で、副院長をしていらっしやる、高校時代のクラスメイトである村上信子さんは、十二月三十一日、花キューピットで仏前の花を送って下さった。

彼女の温かいお心が、花の香りによって遠い青森から私の心に届いたのである。白ユリや白菊の純白の花に混じって、赤い実を付けた千両の花が美しさを添えていた。

彼女からの御葉書も、花の直後に届き、私の心を百に温めてくれたのである。

「アヤ子様、何と行ってよいか、何を言っても貴女には、むなしく響く事でしょう。時がたつのを待つのが最上と思います。何も言えませんが、お花を言葉のかわりに送りました。」

簡単ではあるが、私の胸底に、ひしひしと、響くものがあつた。言葉のかわりにお花が、実にみごとに彼女のお悔やみの心を、私に伝えてくれたのである。

今洋行の遺影は、実家から送られてきた、沢山の花と信子さんからの供花が加えられて、五個の大きな花瓶が美しい花で満たされた。

高校卒業以来、二十八年振りに、クラス会で再会し、あの当時は殆ど話した事になかつた彼女なのに、何故か不思議に気が合い、出世した彼女を、女性として素晴らしい人だと心密かに思っていた。

そのクラス会で、彼女からオリジナルのテレホンカードと青森のお土産を戴いた。

「看護婦さんの絵の可愛いテレホンカードね」

「そうでしょう」

「私、もう一枚欲しいんだけどなあ」

「あら、いいわよ」

「嬉しい！ありがとう、二人の子供がきつと喜ぶだろうなあ」

集合場所迄車で送ってくれた洋行と、私の帰りを待っている千鶴にお土産が出来た事が嬉しかった。しかもこれはオリジナルだから……。

そのテレホンカードは洋行のセカンドバッグに入ってたまま、事故の時、流されてしまったのか、今だに見つかっていない。

## 五、自分に負けるな

佐渡の田舎に住んでいる、何んの飾り気もない質素で、悪気のない何処か子供の様な心をもっている私の叔母が、お正月のない私達家族に、一日も早く元気になる様にと、お餅を送ってくれた。

そのお餅に挟まれるかの様に、そつと置かれた茶封筒、叔母らしく、なかば少しくたびれた様子一枚の硬筆に、今迄私が見たことのない様な大きな字で

「アヤ子

自分に負けるなよ

強い、母親になれよ

来年は幸福な年になる様」

素朴で、簡単なこの言葉が、まるで大地を揺るがす様な力で私の心の中に入ってきた。これが叔母の真実の慰めの言葉であった。言葉を飾り、上手に表現出来なくても、人の心に迫る不思議な力があつた。

エプロンのぼけつとの上から、茶封筒に触れながら、まるで子供が大切なものをかくしている様な気分で、叔母のありがたさを味わっていた。

## 六、想い出の中の君

井上君

いつも笑顔を絶やさず、物真似と似顔絵が得意で、面白いジョークを飛ばして、仲間を盛り上げてくれた君

今、そんな小さな箱の中でも、まるで昼寝でもしているようです。

エンジニアの卵として、勉学に励み、クラブ活動を楽しみ、学生生活をエンジョイしていた君の想い出は、あまりにも多すぎて語り尽くせません。

どんなに悲しい気持ちで君のことを考えても、想い出の中の君はいつも笑っています。そんな君の笑顔も、君が教えてくれた、モータースポーツの危険性も、僕達は決して忘れません。このことを友人一同、君の想い出と一緒に胸に刻み、二度とこのような事のない様に注意し、僕達はこれから井上君



の分まで、一所懸命大事に生きていきたいと思えます。

天国でもハンドルを握り、一所懸命、楽しく走ることでしょうね。後から我々が天国に行く時には、今度は先輩として走り方でも教えて下さい。

本当に今迄、楽しい時をありがとう。心から御冥福をお祈り致します。

嶋 陽二郎

これは親友の嶋君が読んで下さった、自動車部員の心を込めた甲辞であった。この甲辞も又、長い間遺影の前に置かせていただいた。洋行が見たらどんなことを言うだろうか。

「先輩達、俺のことこんなに誉めてくれてる。ちょっとくすぐりたいなあ」

「エンジニアの卵として勉学に励みか、いいこと言ってくれるよ。泣けてくるなあ……」

「想い出の中の君は、いつも笑ってるか。いい先輩達だった……」

「俺、馬鹿だったよ。こんないい先輩達と一緒に、もっともっと自動車部で

頑張っていたかったのに」

「俺一人の命でなかったんだ。皆が、こんなに悲しんでくれてるといふのに……」

「たった一つの命、俺の分迄、頑張ってくれるよな」

多分洋行は、こんなことを言いながら後悔しているのだろう。この広い世の中に、たった一人しかいない自分であり、たった一つの命であったことを……。

この弔間の手紙と弔辞の言葉は、私が自ら立ち直る為の心の籠もった助言となってくれた、弱った体に点滴を打ってもらった時の様に不思議な救いの言葉であった。

私にとって分かることは、逆縁の痛手は、経験したものでなければとても分かってもらえるものではないという事である。理解して欲しい、私と一緒に泣いて願うのは、他の人にとっては所詮無理であり、結局、自分で立ち直りの道を見つけ出さねばならないという事であった。

第五章 永遠の誕生日



## 一、佐渡の見える丘で 祖母

### 悲報に絶句

真夜中の電話が孫の事故を伝えてきた。息子が魚沼病院に電話を入れる。声かずり、受話器を持つ手が震えていた。既に孫は亡くなってしまったと言う、信じられない。佐渡発の船は朝迄無く、その時迄の数時間は実に長い長いものだった。何かと仕度をしながらも、どうしても喪服を持つ気になれなかった。

遺体安置室へ入った時、娘が白布を取りのけて、無言のまま茫然と絶ちつくしていた。こわばった表情の娘婿と、魂の抜けた様な孫娘とは、遺体の両側に言葉も無く寄り添っていた。胸の上にしつかりと組み合わされた白い冷たい手に触れた時、やっぱり死んでしまったのだという思いが心をうめた。

丁度一カ月前のお盆には、例年の様に花の手伝いに来ていたのに。毎年、お盆

とお正月と彼岸には必ず手伝いに来てくれていた。佐渡で生まれ、四歳迄は佐渡に居たあの子は、殊の外佐渡を愛した。佐渡の山にも海にもよく親しんでいた。私達を乗せてドライブもしてくれた。運転は慎重で、シートベルトをつける迄は発しないし、急いでいても制限速度をよく守っていたあの子が何故にと、とりとめのない思いに苛まれる。

#### 一本の月見草

枕元に置かれた白いヘルメットの中のジャンパーは濡れていた。その濡れた胸元のあたりから、一本の月見草が出て来た。十五センチ位の細いたった一輪の花をつけた月見草が……。黄色い花びらは千切れていた。事故は深夜なのに、どうして河原の月見草が、ジャンパーの中に紛れ込んだのか。洋行が手折って胸に持っていたのか。又救出される時、河原に咲いていたのが紛れ込んだのか。どちらにしてもこの月見草は、孫から娘への最後の送り物であったにちがいない。私は月見草に頬摺した。孫の遺体と共に家に来たこの月見草、私はこれからも河原に

月見草を見る度に胸が痛むだろう。

あれから数カ月、五月十三日の洋行の誕生日。私は例年の様に誕生祝電を打つ。心の中で何時迄も生き続ける孫に、誕生祝いをしてやりたくて。私達にも必ず祝電や、電話をくれた洋行はもういない。いや、そうではない、きつと黄泉の世界から、何時もの穏やかな笑みで、いろいろと語り掛けているにちがいない。

あのこの好きだった白や、青紫色のてっせんの花を眺めていると、海星幼稚園の頃、私と一緒にいった楽しかった遠足が思われる。

#### 永遠の休憩地

私もかつて、娘と双子であった長男を八十二日目で失い、逆縁の身を歎いたこともある。何の因果か娘も又私と同じく、いやそれ以上に、生涯、逆縁の辛さを背負って、何時も心の底に拭いきれない痛みを隠して生きていくのであろう。

我が子との二十一年間の数え切れない思い出を、大きな袋にぎっしりと詰め込み、その中から一つ一つ取り出しては、深い悲しみに涙する娘の顔を見ることは

忍び難い。又兄を失った孫娘のあの小さな胸の中を思うと、あまりの無念さに心が痛む。世間の多くの人が、こうした悲しみに堪えてきているだろう事を、初孫を失って今こそよく分かってきた。

墓地のこと等、考えてもいなかった新所帯の夫婦に、自分より先に子供のお墓を作らなければならないとは、あまりにも残酷である。

娘が私に、

「この場所は、夕日コンサートを鑑賞することが出来て、シンセサイザーに首っただけだった洋行はきつと喜んでくれるだろう。勿論、佐渡も見えるから……」  
と言った子供を思う母親である娘の心情が、私には痛い程分かり、そっと目頭を押さえた。

太陽が西の空に沈む頃、真つ赤に燃えた夕日と限りなく続く青い海、そして地平線、さぞかし素晴らしい眺めであろう。

もうすぐ夕日コンサートの日も近づくと、音と光の織り成す幻想的な美しさの中

で、孫は安らかに眠ることが出来るだろう。小鉢の高台の墓地は、二十一歳の若さのまま眠るにふさわしく、波の彼方に佐渡も見える。

## 一、五月

### 鶯の鳴く小千谷

桜前線も掛け足で通り過ぎ、自然は春から初夏へと衣替えをし、風薫る季節となった。家々の庭には、芝桜、都忘れ、パンジー、サツキ等が美しさを競うように咲いている。

今年も又、いつものようにゴールデンウィークを迎えた。事故以来、毎日そう思ってしまうのだが、「去年の今頃、洋行は……」と考えてしまう。去年の五月三日は、洋行が帰って来てくれた日であった。今迄、単身赴任を続けてきた私の弟が、今度は家族一緒のブラジル生活が決まり、子供達がお別れに我が家に来てく



れたからである。あの日は、心持ち肌寒い日ではあったが、水原の瓢湖、昆虫の家と楽しい一時を過ごした。その日の夕食は、私が公民館で習ってきたばかりの豆腐バーグであった。食べ盛りの子供達はお皿をからっぽにしてくれたことを覚えていいる。二人の子供達が増え、夜遅く迄、笑い声の絶えなかった一日であった。

翌日の五月四日、せめてもう一日ゆっくりしていけばと思う私の気持ちをよそに、洋行は長岡へ帰っていった。多分、長岡で友人達との約束でもあったのだろう。高校時代からアパート生活を夢見ていた洋行にとって、大学生活はどんなに楽しかったことが。

六十三年のゴールデンウィークを思い出しながら、私達三人は、五月四日、あの身を切られるような悲しい事故現場へと出かけた。初夏とはいえ、ブラウス一枚でも暖かい程の一日であり、私と千鶴にとっては今年初めての現場であった。去年の暮れ、雪一色であった小千谷の山も、今は何処を見ても若草色に染まっていた。

早春の頃、主人が土の中から小さな頭をそつと出し、春に驚いているかのよう  
な一本の土筆を摘み取ってきた。それをコップに入れて遺影の前に供えたのは、  
もう二カ月前のことなのか……。

私達は白菊の花を供え、手を合わせた。無言で目を閉じている三人の心の中は、  
無念の涙で濡れていた。どなたが供えてくれたのか、まだ新しいスプライトとお  
菓子が……。洋行を思い、今だにこうして現場へ来て下さった友人を、私は嬉し  
かった。私達家族と同じように友人達も又、何時迄も洋行の事を忘れないで欲し  
いという思いが、心の何処かに潜んでいる。

現場にはまだはつきりと、車のわだちが残っていた。悲しみの思いで見つめて  
いると、何処からか鶯の声が聞こえてきた。静かな小千谷の山あいに、川のせせ  
らぎと美しい数羽の鶯の声が美しく溶け合っていた。心が洗われるような鳴き声  
に耳を傾けていると、

「お母さん、あの鶯はお兄ちゃんじゃないの！」

と千鶴が私に話しかけた。

「そうだ！これは洋行の声よ、この鶯は洋行なのよ。私達が来て喜んでいるのだわ」

私は思わず唇を噛んだ。もう少して涙を落とすところであった。

一本の古びた木に這うように山藤が、薄紫色の花を付け、すぐ近くの小さな田んぼの中には、気持ちよさそうにおたまじゃくしが泳いでいた。こんな長閑な風景を見るのは十数年振りであった。佐渡の田舎で、おたまじゃくしや、めだかを捕まえて喜んでいた洋行の幼なかりし頃が頭の中を駆け巡る。このような美しい静かな山で、洋行は安らかに眠ることが出来るであろう。

#### 二十二歳の誕生日

五月十三日は、洋行の誕生日であり、翌日の十四日は八回目の命日であった。

五月という月が近づくにつれ、ズッシリとのし掛かってきた胸のつかえを、取り除くことも出来ないまま、五月十三日となった。

十一日は祖母の誕生日であり、洋行は自分と二日違いの祖母の誕生日を忘れたことがなく、毎年、祖母に電話を掛けていた、祖母からも毎年、メロデイ入りや、押し花の祝電が届いていた。

洋行の遺品を整理していた時、昭和六十三年五月十三日の二十一歳を祝う祝電を見つけ、そこからは誕生日を祝うメロデイが鳴りだした。何ともいえない空しさか私を襲い、私は思わず耳を塞いだ。今年でははや、洋行の声を聞くこともかなわない。去年は長岡で友人と誕生日を祝い合っていたのに……。

人の命の儚さ、運命のいたずらに、体中から溢れてくる無念の思いで、遺影の中の洋行を見詰めていた。祭壇の前に、祖母からの二十二歳を祝う祝電と、私達家族からのケーキが供えられていた。

祝電は、祖母も又私と同じく、洋行は生きているのだという実感の現れであった。電文は「今日は二十二歳のお誕生日だね、心の中の洋行、おめでとう」と書かれていた。

私達は、家族四人のつもりで、祭壇の前でケーキにナイフを入れた。誕生日おめでとうと掛かれたデコレーションケーキ、一番美味しそうなところを洋行に供えた。傍らで主人が、今は洋行の遺品となってしまったCDの中から、椎名恵の『愛は眠らない』を聴かせていた。

「このケーキうめえなあ！」と行っている洋行の声が聞こえたような気がした。

たとえ姿、形は無くとも、祖母をはじめ私達家族の心の中に、洋行は鮮やかに生き続けている。無くなったからといって、存在の無くなるような子ではないことを私達は信じていた。来年も又二十三歳の誕生日を家族四人で祝いたい。

ろうそくの炎とお香の中で、椎名恵の甘い曲が流れていた。

## あとがき

二十一歳の若さでたった一つの生命を敵らしてしまった息子、爽やかな緑の五月に生まれた二十二歳の誕生日の日も過ぎた。

もうすぐ一周忌を迎えるというのに、未だに息子の死が信じられぬまま、心の動揺を制する事が出来ない日もある。

極限の悲しみに直面し、逆縁の身を歎き、悲しみのドン底を嫌という程味わった。そこからの立ち直りは至難の業であり、自分で立ち直る道を見つけ出す以外ない。

その様な中で、およそ物を書くという事に、或る種の抵抗さえ感じ、用件は電話で済ましていた私が、ただひたすら悲しみのドン底を夢中で書き留めてきた。

それは、息子の存在を活字として、永遠に残したいという気持ちと、私の心の整

理でもあった。その間には、涙でペンが動かぬ事も度々あった。これは鎮魂の書というものかも知れない。

交通死急増の世の中、私と同様、愛する人を失った心の痛手を背負ったひとたち、この本が少しでも力になれたならば幸いです。

愛する息子は逝った。しかし私の心の中で、母と子の深い絆は永遠のものであると確信している。純白の花に包まれた遺影の前で、甘酸っぱい微笑みを浮かべている息子の顔を見つめると、二十一年間の幸せだった日々が思われる。